

松ヶ崎遺跡

—八戸南環状道路建設事業に伴う遺跡発掘調査報告—

2001年3月

青森県教育委員会

序

八戸市には多くの遺跡が所在することが知られており、とくに新井田川流域には是川遺跡、赤御堂貝塚、蟹沢遺跡など、古くからよく知られた遺跡が分布しています。

本書で報告する松ヶ崎遺跡もその一つで新井田川右岸の段丘上に位置しています。平成5・6年度に八戸市教育委員会が行った発掘調査によって、縄文時代中期の竪穴住居跡が密集状態で検出されるなど、次第にその様相が明らかになりつつあり、隣接の西長根遺跡と合わせて、縄文時代中期を中心とする大規模な集落遺跡です。

この遺跡の一部を国土交通省が事業を推進する八戸南環状道路が通ることとなり、平成11年度に当センターが遺跡の北側の発掘調査を実施いたしました。調査の結果、この区域からは住居跡は検出されず、遺物の分布も希薄であることから、今回の調査区域は遺跡の縁辺部に当たるものと考えられ、検出した土坑や出土遺物から縄文時代中期の終わり～後期の初め（約4000年前）に利用されたことが分かり、松ヶ崎遺跡の規模や変遷の一端を明らかにすることができます。

本書を刊行するに当たり、今回の発掘調査の実施及び遺物整理等についてご指導ご協力を賜った関係各位に対して、厚く御礼申し上げます。

平成13年3月

青森県埋蔵文化財調査センター
所長 中島 邦夫

例　　言

1. 本報告書は、八戸南環状道路建設事業に伴い、青森県埋蔵文化財調査センターが平成11年度に発掘調査を実施した八戸市松ヶ崎遺跡の発掘調査報告である。
2. 本報告書の執筆者名は、依頼原稿については文頭に、その他は末尾に記した。
3. 出土した石器の石質鑑定は県立八戸南高校教諭 佐々木辰雄氏に依頼した。
4. 依頼原稿は、編集の都合により書式を変更した部分がある。原文の意味を損ねることのないよう留意したが、それにより意味に異同が生じた場合はすべて編集者の誤解・理解不足によるものである。
5. 本報告書に掲載した地図は、国土地理院発行の5万分の1地形図「三戸」「階上岳」および1/2,500八戸市都市計画図を複製したものである。
6. 本書を編集するに当たり下記の諸氏にお世話をになった（50音順 敬称略）。

宇部則保・小保内裕之・坂川 進・村木 淳

凡　　例

- 1 遺構の表記は青森県埋蔵文化財調査センターで定めた下記の略号を使用している。

S B	掘立柱建物跡	S D	溝跡	S E	井戸跡	S I	住居跡
S K	土坑	S N	焼土遺構	S Q	配石・集石遺構	S R	土器埋設遺構
S T	捨て場	S V	溝状土坑	S X	その他の遺構		
- 2 掘図中の北方位は、座標北である。
- 3 掘図の縮尺は、各掘図にスケールとともに示した。ただし、座標の表示のあるものについてはスケールを示していない場合がある。
- 4 掘図中で用いたスクリーントーンの指示は次の通りである。



クボミ・タタキ



スリ

- 5 繩文原体の表記は『日本先史土器の縄文』(山内清男、1979年)に従ったが、観察表中では略記した場合がある。(羽状縄文結束第〇種→羽状結束〇種 単軸絡状体→単絡 多軸絡状体→多絡)
- 6 観察表中の胎土の項目は混和物に主眼をおき、略号を用い、特に量の多いものはゴシック体で表記した。(繊維→繊 海綿骨針→骨 風化した岩片→岩 酸化鉄→鉄 浮石→浮 凝灰岩→凝雲母→雲)
- 7 観察表中の内面調整は、同じ器面内で調整の方向が異なる場合、口唇からの距離を示し以上と以下の調整方向を示した。
- 8 遺物写真の縮尺は土器・礫石器が約1/3、剥片石器が1/2である。

目 次

第1章 調査の概要		
第1節 調査要項	2	
第2節 周辺の遺跡とこれまでの調査	2	
第3節 調査の方法	4	
第4節 調査の経過	4	
第2章 遺跡と周辺地域の周辺の地形・地質	八戸市文化財審議委員 松山 力	5
第3章 検出された遺構と出土遺物		9
第4章 遺構外出土遺物		
第1節 土器・土製品	16	
第2節 石器・石製品	16	
第3節 その他の遺物	24	
第5章 まとめ	27	
写真図版	29	
参考文献	38	
抄録	38	

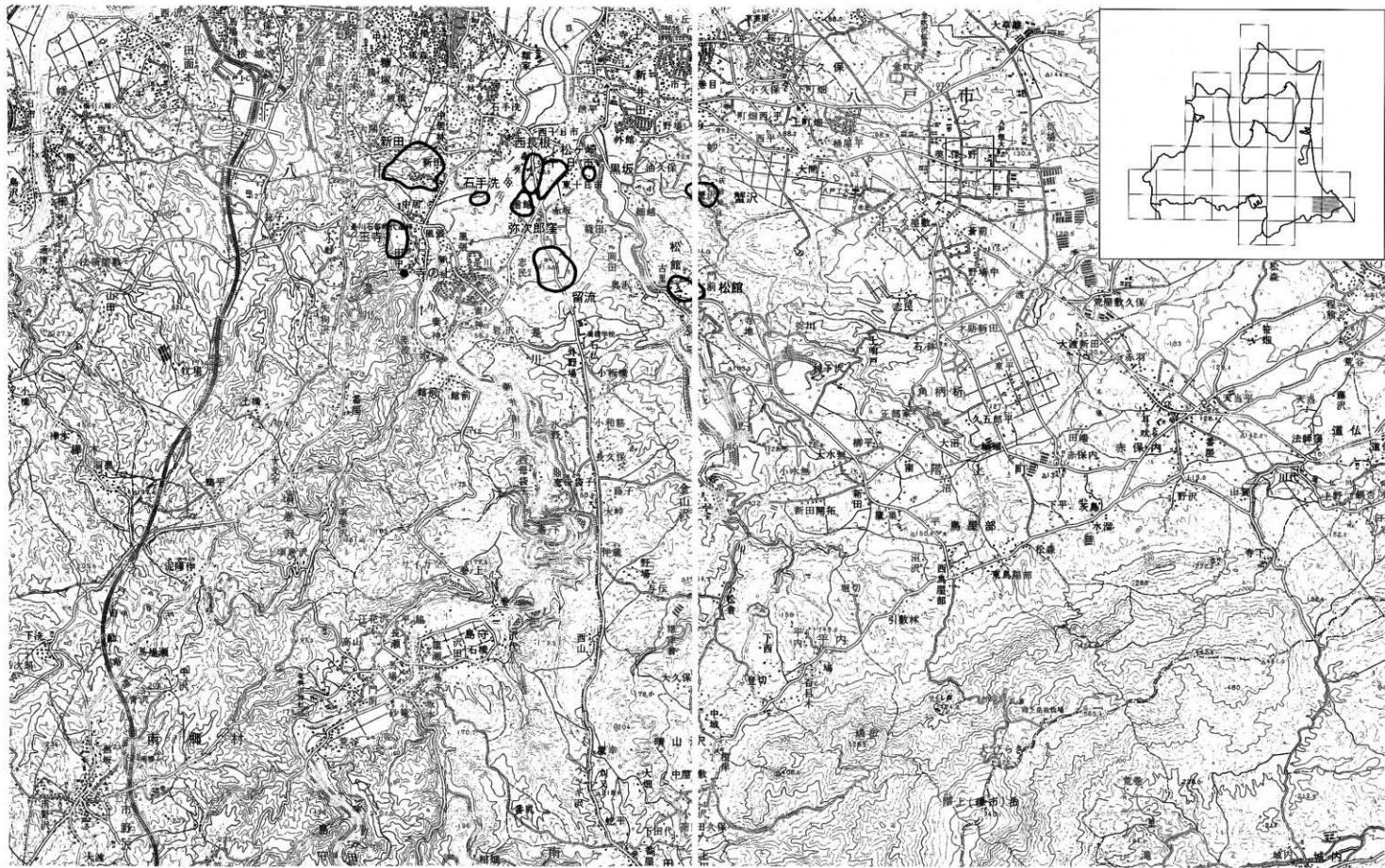


図1 遺跡位置図 (S=1/50,000)

第1章 調査の概要

第1節 調査要項

1 調査目的	八戸南環状道路建設事業の実施に先立ち当該地区に所在する松ヶ崎遺跡の発掘調査を行い、その記録を保存し、地域社会の文化財の活用に資する。	
2 調査期間	平成 11 年 7 月 5 日から同年 10 月 29 日まで	
3 遺跡名及び 所在地	松ヶ崎遺跡（青森県遺跡台帳番号 03068） 八戸市大字十日市字松ヶ崎、風渦、長根	
4 調査対象面積	6,700 m ²	
5 調査委託者	国土交通省東北地方整備局	
6 調査受託者	青森県教育委員会	
7 調査担当機関	青森県埋蔵文化財調査センター	
8 調査協力機関	八戸市教育委員会	
9 調査体制	調査指導員	市川金丸（考古学 青森県考古学会会長）
	調査協力員	森林 康（八戸市教育委員会教育長）
	調査員	松山 力（地質学 八戸市文化財審議委員） 工藤竹久（考古学 八戸市教育委員会文化課副参事）
	調査担当者	青森県埋蔵文化財調査センター
	所長	中島邦夫
	次長	成田誠治
	総務課長	成田孝夫（現県工業振興課課長補佐）
	調査第二課長	福田友之
	文化財保護主事	中村哲也 佐藤（旧姓下山）純子
	調査補助員	盛 祐子 神 早苗 工藤 美奈子 鳴中 加奈子

第2節 周辺の遺跡とこれまでの調査

松ヶ崎遺跡は八戸市の中心部から南東に約 4.2 km、新井田川右岸の段丘上に位置する、縄文時代中期を主体とする遺跡である。隣接する西長根遺跡とは一体の遺跡である（以下、遺跡全体を指す場合は松ヶ崎・西長根遺跡と記述）。別遺跡として登録されているのは、この遺跡が古くから知られており、当初は地点ごとに遺跡を認識していたことによる。1956 年には江坂輝彌氏が長根貝塚出土の貝類を紹介している（江坂 1956）。1960 年には音喜多富寿・松山力両氏を中心とした青森県立八戸北高校の調査が、1967 年には滝沢幸長氏を中心とした光星学院高校の調査が、いずれも宅地や農地の現状変更に伴い実施されている。前者では石器炉や円筒上層式土器・石器が、後者では小規模貝層・円筒下層式土器・上層式土器が検出されている。1990 年代以降、周辺の宅地化がすすみ、八戸市教育委員会により個人住宅建設に伴う発掘調査が逐次実施され、縄文時代中期後葉の住居跡・墓・貯蔵穴・捨て場等が多数検出されている（八戸市教育委員会 1994、1995a・b、1999a・b、2000）。

松ヶ崎・西長根遺跡を中心とする周辺 2 km 圏内には中期を中心とする遺跡が点在する。発掘調査や資料紹介のなされた遺跡は、石手洗遺跡（円筒上層 d・e 式：八戸市教育委員会 1990）、是川一王

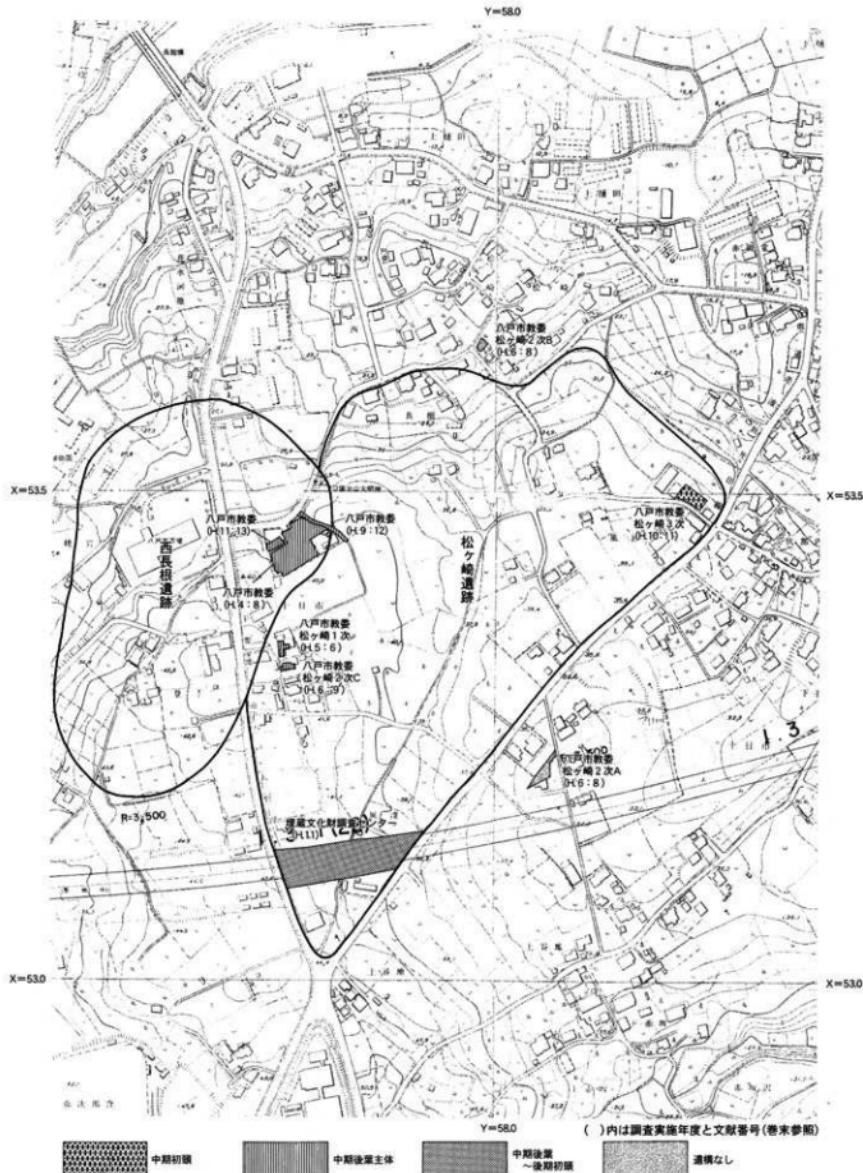


図2 調査区位置図 ($S=1/5,000$)

寺遺跡（前期～中期：山内先生没後 25 周年記念論集刊行会 1996、八戸市教育委員会 1998）、蟹沢遺跡（前期～中期：江坂 1958、八戸市教育委員会 1998・1999a）、新田遺跡（中期末：1998 年当センターにより範囲確認調査、松館貝塚（江坂 1956）がある。その他に青森県遺跡台帳に登録された遺跡として留流遺跡（遺跡台帳番号 03016）、寺の上遺跡（03144）がある。時期的には若干ずれるものの関連する遺跡として黒坂遺跡（中期末～後期初頭：青森県教育委員会 2001）・弥次郎窪遺跡（中期・後期初頭、後期初頭主体：青森県教育委員会 1998）があり、特に弥次郎窪遺跡は松ヶ崎・西長根遺跡に隣接し、遺跡の変遷を考える上で重要である。

第3節 調査の方法

グリッド設定 グリッドは 4 m 四方とし、路線幅杭の座標値を基に、平面直角座標系第 X 系にその軸が一致するように設定した。遺跡全体を包含するよう、かつ平面直角座標値の 10(m) 以下が 0 になる点を原点とした結果、X=53,000 Y=57,500 がグリッド原点となった。この原点を I A -0 と呼称し、X 軸にローマ数字と A～Y のアルファベットの組み合わせを、Y 軸に算用数字をあて、X の座標値が 4(m) 増えるごとに I A、I B、… I Y、II A、II B …、Y 軸の座標値が 4(m) 増えるごとに 1、2、3 … のごとく表記し、グリッド名は南西隅のグリッドライン交点の名称を以て当てる。
包含層の掘進 調査開始前の現況、調査の進捗状況等によって、重機による表土除去、人力による表土除去を適宜選択し、表土以下は人力で掘り下げた。また、調査の進行に伴って、遺構が全面に分布する可能性は低いと考えられたので、全面調査とトレンチ調査を併用した。

遺構外出土遺物の取り上げ 遺構外の層序はローマ数字を以て表記した。遺構外出土遺物は層位とグリッドを記録して取り上げた。土色は『新版標準土色帖』（小山正忠・竹原秀雄編著）に従った。

遺構の精査と記録 遺構は種別ごと・検出順に名称を付した。調査後、擾乱と判明した場合は欠番とした。土坑は 2 分法を採用し、分層発掘に努めた。層序は算用数字を以て表記した。遺構から出土した遺物は遺構内堆積土の層位ごとに取り上げ、必要に応じて出土位置を記録することとしたが、特に記録の必要のある出土状況は認められなかった。実測図は 1/20 縮尺で作成した。写真は 35 mm リガーサルフィルム・35 mm モノクロフィルム (ISO400)、35 mm カラーネガフィルム (ISO100) を用いて撮影した。

第4節 調査の経過

旧況は宅地・畠地・果樹園であった。宅地跡はおよそ 87 ライン以東、II K ライン以南である。一部に基礎が残されており、6 月 29 日、重機によりこれを撤去し、併せて宅地跡の表土も除去した。その結果、宅地跡はいわゆるローム上面まで削平されている事が判明した。7 月 5 日、プレハブ・仮設トイレ等を設置した。7 月 6 日、機材を搬入し、宅地跡の調査を開始した。7 月 15 日以降、宅地跡の調査が相当程度進行し、果樹園跡の調査に着手した。果樹園跡はおおむね 87 ライン以西で、遺構・遺物の分布密度が低いことが予想されたので人力によりトレンチ調査を実施し、宅地と果樹園の境界付近に土坑数基が検出された。この付近を除いて遺構は検出されず、大部分はトレンチ調査で終了した。おおよそ II K ライン以北、95 ライン以東は、畠地・畠地への進入路で、9 月 13 日以降、人力によって表土を除去し、包含層を掘り進めた。土坑数基が検出されたものの、精査の結果現代のものと判断された。10 月 28 日、予定通り調査を終了した。調査時に建物の残されていた南東区域は、調査の結果から要立ち会い区域とする事となった。

(中村)

第2章 遺跡と周辺地域の地形・地質

八戸市文化財審議委員 松山 力

1. 遺跡の位置と周辺の地形

松ヶ崎遺跡の発掘調査が実施された部分は、北緯 $40^{\circ} 28' 36''$ 、東経 $141^{\circ} 30' 57''$ 地点周辺の高館段丘面上、高度(海拔)37 ~ 42m の区域で、久慈街道(八戸大野線)を挟んで西側に弥次郎窪遺跡が隣接する。遺跡を取り巻く地域の地形概要は、『青森県埋蔵文化財調査報告書第128集 弥次郎窪遺跡』および『同第238集 弥次郎窪遺跡II』に詳細に述べているので本報告では省略する。

図3は弥次郎窪遺跡や東方の黒坂・丹内・蟹沢(2)遺跡を含む東西約 5.5 km、南北約 4 km の範囲の地形区分図である。遺跡の西北西方 600m ~ 700m を新井田川が北東に流れ、東方 700 ~ 800m を松館川が北北西に流れている。両川は北北東方約 1.2 km付近で合流して進路を北に向ける。合流点付近からは沖積低地が北方にラッパ状に開け、八戸湾との間にやや広い海岸平野を展開している。

遺跡をのせる高館段丘面はごく緩やかに起伏していて、西方の新井田川沿いにはより低位の根城段丘が付随する。発掘調査された部分に限ってみれば段丘面は東方にごく緩やかに傾斜している。

2. 周辺地域の地質の概要

東方の太平洋岸、西方を流れる新井田川、南方の階上岳北麓に囲まれた八戸平原地域と、階上岳山塊のほとんどは、その基盤が先第三紀の古期岩類で占められる。南方の階上岳山塊は主として花崗閃綠岩からなり、また太平洋沿岸部には輝綠岩・玄武岩・安山岩などの火成岩類も多いが、これらを除けばほとんどが粘板岩・砂岩・礫岩・チャート・石灰岩・塩基性凝灰岩(輝綠凝灰岩類)などの堆積岩類で、遺跡の直近付近では石灰岩・チャート・粘板岩が卓越する。

これらの古期岩類を覆って、その表面(旧地表)の凹凸をならすように段丘堆積物がのっている。段丘堆積物は砂礫層・砂層・シルト層・粘土層などの水成堆積物と火山碎屑物とで構成され、上部は地表直下の黒色土類に漸移する。

火山碎屑物は下位から、粘土化した軽石層を幾枚も挟む粘土質褐色火山灰(いわゆるローム層)で構成される天狗岱・高館両火山灰層と比較的新鮮な八戸火山灰層とに区分される。天狗岱火山灰層はおよそ 10 万年以前に、高館火山灰層はおよそ 10 万年前以降、八戸火山灰層は從来の年代測定では 13,000 ~ 12,000 年前に堆積したものである。地表直下の黒色土層中には、成層あるいは断続する繩文時代前期の中擬浮石層が挟まれ、また遺構や小凹地の埋積土などには平安時代の十和田 a 降下火山灰や苦小牧火山灰などの薄層が散見される。また、縄文時代早期の土層には南方で成層した南部浮石層を構成する軽石粒や、弥生時代初頭の降下とみられる西方の十和田 b 降下火山灰層を構成する軽石粒が隨所で密にあるいはまばらに混入している。

3. 遺跡の土層序

遺跡の基盤は主に古期岩類の粘板岩とチャートで、直近地域には石灰岩が分布し、これらの上を第四紀後半の風成褐色火山灰層(いわゆるローム層)を主とする地層が覆っていて、その上部は黒色土層類(腐植土=いわゆるクロボク)に漸移する。

図4は発掘された II F - 70 グリッドと II G - 80 グリッド、および II P - 108 グリッドの断面の一部の土・地層の柱状対比図である。それぞれのグリッドをこの順に A 地点、B 地点、C 地点と

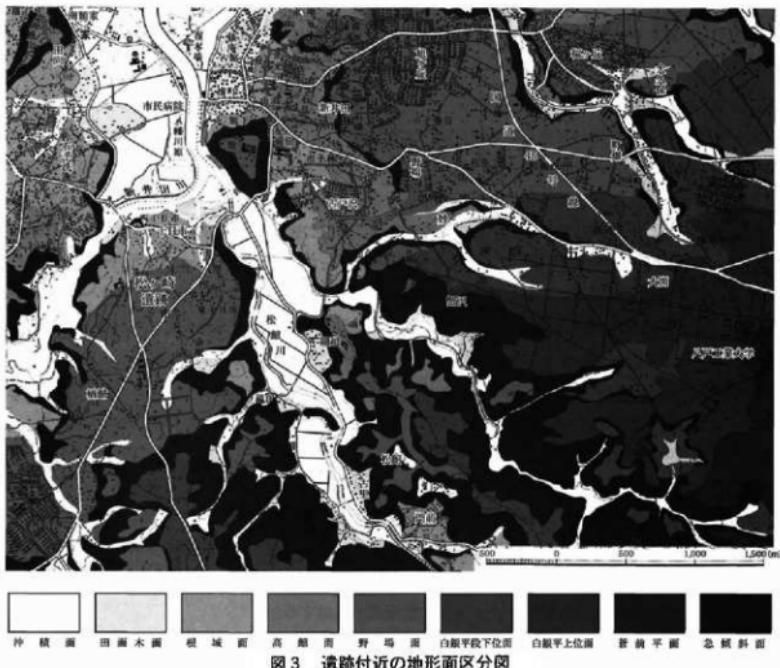


図3 遺跡付近の地形面区分図

し、以下に述べる厚さはこの3グリッドの土層を総合したもので、土色は農林水産技術会議事務局監修の標準土色帳の色片による。

土・地層は上から第Ⅰ層～第Ⅶ層の7層に大別された。

第Ⅰ層は厚さ15～65cmの暗褐色(10YR3/3)～黒褐色(10YR2/3)砂質土層である。全体に粒径2～7mmの灰白色(10YR8/2)ないし浅黃橙色(10YR8/3～4)あるいはにぶい黄橙色(10YR7/2)の固い軽石粒が散在している。この軽石粒は十和田b降下火山灰に由来するものである。小さい谷跡とみられる小凹地を被覆しているC地点では第Ⅰ層は上からI-a～I-cの3層に分けられる。第Ⅰa層は厚さ18～32cmで最も厚く、粒径数mm程度(最大7mm)の褐灰色(10YR5/1)細礫が散らばっている。第Ⅰb層は厚さ2～15cmで苔小牧火山灰と思われる最大粒径1cm程度のにぶい黄橙色(10YR6/4)火山灰塊が断続するようにならび、全体に微細な白色鉱物が目立っている。また、第Ⅰa層同様、粒径3～7mmの褐灰色(10YR5/1～6/1)細礫が散らばっている。第Ⅰc層は黒褐色(10YR2/3)でもっとも暗い色調を示す。C地点にみられるような細礫はほぼ全域に散らばり、A地点では粒径が4～15mm(最大25mm)でもっとも粗くなっている。礫の岩種にはチャート・頁岩が多い。

第Ⅱ層は厚さ1～24cmの黒色(10YR1.7～2/1)・黒褐色(10YR2/2)土層で、十和田b降下火山灰に由来する粒径2～6mmの固い灰白色(10YR8/2)・浅黄色(10YR8/3～4)軽石粒が散らばり、また

微細な白色鉱物が目立つ。

第Ⅲ層は厚さ5~38cmの黒褐色(10YR2/2)土層ないしは黒褐色(10YR2/3)土~暗褐色(10YR3/2~4)土層で、ところによってその色調は上から下へ黒褐色から暗褐色へと漸移する。これらの土層にも十和田b降下火山灰に由来する粒径2~6mmの浅黄橙色(10YR8/3~4)ないしはにぶい黄橙色~明黄褐色(10YR6/4~6)など風化の程度によって色調の異なる固い軽石粒が散らばっている。またところによりまばらにところによりやや多量に中揮浮石由來の灰白色~浅黄橙色(10YR8/2~4)砂粒大軽石粒が混入し、さらに、これらとは別に粒径3~8mmの灰白色~浅黄橙色~黄橙色(10YR8/2~8、7/8)や明黄褐色(10YR7/6)など多彩な色調の軽石粒がまばらに散在している。第Ⅲ層は中揮浮石降下以後の堆積層と思われる。

第Ⅳ層は厚さ0~42cmの黒色(10YR2/1)~暗褐色(10YR3/3)土層でやや粘性に富む。色調は上から下へ明るさを増す。上半部が薄くなるところがあり、B地点ではほとんど欠如している。土層中に南部浮石に由来するとみられる、Ⅲ層と同様に色調が多様な粒径3~7mmの軽石粒がまばらに、ところによってはやや多量に混入している。

第Ⅴ層は厚さ8~30cmの暗褐色(10YR3/3~3/4~4/4)土層で、やや粘性に富む。A地点では土色が下方へ次第に明るくなり、粒径2~6mmのにぶい黄橙色(10YR6/4)~黄橙色(10YR6/4)~明黄褐色(10YR6/6)軽石粒を上半部でやや多量に下半部でまばらに含んでいる。C地点では中位から下位にかけて粒径20×30~50×60mmの褐色(10YR4/5)土塊が断続的に含まれている。B地点付近では欠如する。第Ⅰ層から第Ⅴ層までの合計層厚は第Ⅳ~第Ⅴ層が欠如するB地点周辺を除き72~138cmで、B地点では58~72cmとなる。

第VI層は下底部に厚さ2~8cmの黄褐色(10YR5/6)細粒軽石層(VIb層)を伴う厚さ42~60cmの風化火山灰層(いわゆるローム層)で、その色調は褐色(10YR4/4~10YR4/6)から黄褐色(10YR5/8)へと下方ほど色調が明るくなっている。

第VII層は厚さ22~58cmの火碎流相を示す火山灰層(A地点のVIc層とB・C地点の全層)で、その色調は上から褐色(10YR4/4~6)~にぶい黄褐色(10YR5/4)~黄褐色(10YR5/6)あるいは明黄褐色(10YR6/6)と変化し、下方ほど明るい。

第VIII層は八戸火山灰層と一括される降下火山灰と降下軽石の互層で130~140cmの厚さである。その下に高館火山灰層(IX層)の黄褐色(10YR5/6)火山灰最上部が確認されたが詳細は不明である。

なお、C地点の第VI層直下の火山灰層と軽石層は、その層相からこの順にVIIb層とVIIc層と思われるが詳細は不明である。

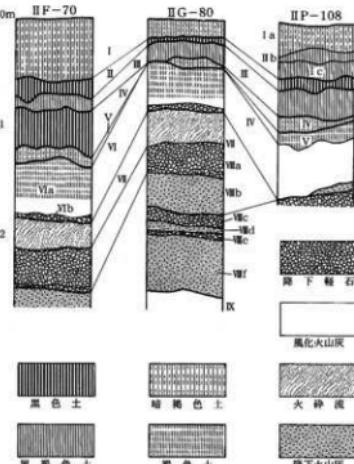


図4 土層断面柱状対比図

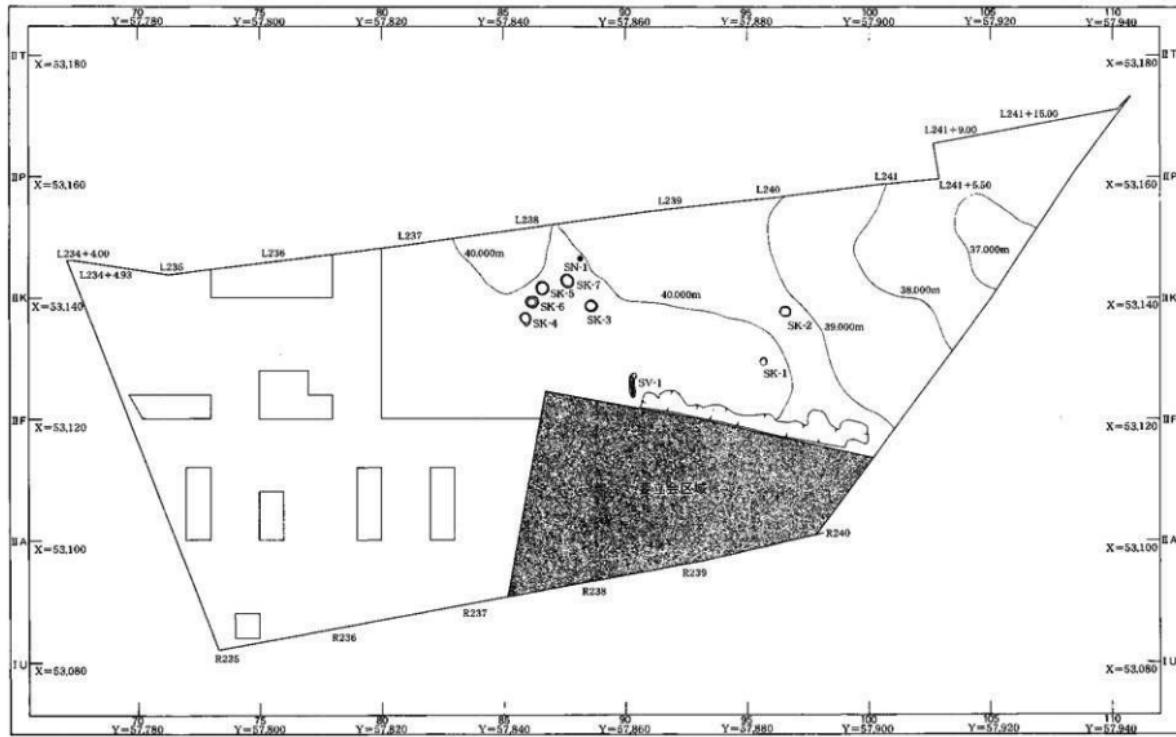


図5 造構配置図 (S=1/800)

第3章 検出された遺構と出土遺物

平成11年度の調査で検出された遺構は土坑7基、溝状土坑1基、焼土1基である。土坑は調査区中央部付近に5基が半円形にまとまって位置し、残りの2基は東半部に位置する。調査区東半の調査結果から、西半部での遺構・遺物の密度は低いものと推定され、トレンチ調査を実施したが、調査区中央部付近を除いて遺構は検出されず、また遺物もほとんど出土しなかった。

第1号土坑 (SK-1) [図6]

[位置・確認] II H-95 グリッドに位置する。第VI層中で確認した。[形状・規模] 開口部で径77cm、確認面からの深さ17cmである。南半は住宅基礎により破壊されていたため全体の形状は不明だが、円形を呈すると推定される。[底面・壁] 底面は平坦で、壁はほぼ真っ直ぐに立ち上がる。[堆積土] いずれも基本層序第Ⅲ層に類似する砂質シルトである。[出土遺物] なし。[時期] 堆積土が基本層序第Ⅲ層に類似し、十和田b浮石を含まないことから縄文時代のなかでも前期後葉以後と考えられる。(中村)

第2号土坑 (SK-2) [図6]

[位置・確認] II H-95 グリッドに位置する。周辺は第VI層中まで削平を受けており、第VI層中で確認した。堆積土の一部も住宅基礎による攪乱を受けていた。[形状・規模] 開口部は不整な椭円形を呈し、最大で1m84cm、最小で1m38cmである。底面はやや不整な円形で、1m82cmを計る。確認面からの深さは73cmである。[底面・壁] 壁は内傾して立ち上がる。底面に溝・ピット等は認められなかった。[堆積土] 29層に分層された。基本層序第Ⅲ層に類似する黒色系の砂質シルトと火山灰土から構成される。火山灰土は壁際に多く認められ、崩落によるものと判断された。これらのことから自然堆積と考えられる。[出土遺物] 第8層・第20層から縄文土器の小片2点が出土した。中期末葉～後期初頭のものと思われる。[時期] 本遺構に明確に伴う遺物がないため不明である。(中村)

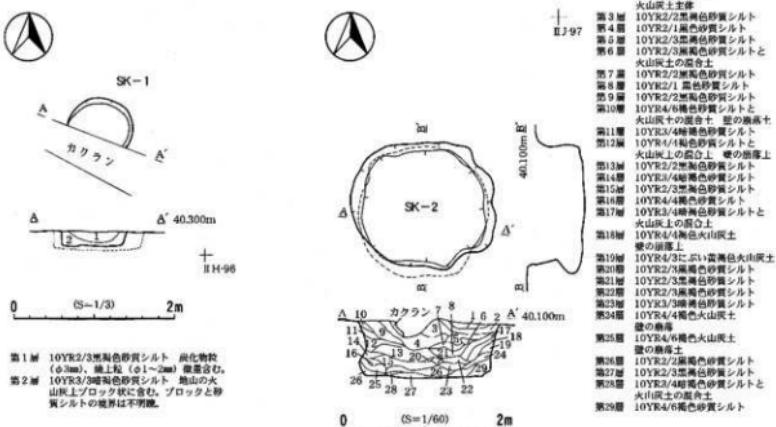


図6 SK-1・2

第3号土坑（SK-3）[図7・8]

[位置・確認] II K-87に位置する。周辺は第VI層中まで削平を受けており、第VI層で確認した。[形状・規模] 開口部は1m59cm、底面は1m90cmの円形を呈する。確認面からの深さは1m10cmである。[底面・壁] 壁は内傾して立ち上がる。中位には崩落によると思われる凹凸があり、上位1/5で外傾する。底面は第VII b層で平坦である。溝・ピットは認められなかった。[堆積土] 39層に細分された。基本層序第III層に類似する黒色系の砂質シルトと火山灰土からなる。火山灰土は壁際に多く認められ、崩落によるものと思われる。これらの点から自然堆積によるものと考えられる。[出土遺物] 第2層(第9層上面)から石皿、第31層から扁平な川原石が出土した。石皿・礎は本遺構の埋没過程で投げ込まれたものと考えられる。また、第2層・第3層・第9層・第20層・第31層から繩文土器片が計6点出土した。接合作業の結果、個体数は3点となったが、これらは同一個体と考えられる。時期は最花式期～大木10式平行期に属するものと思われる。堆積土上位の遺物と下位の遺物が接合することから本遺構周辺にあった個体が、本遺構の埋没過程において時間差をもって流れ込んだものと考えられる。[時期] 本遺構に明確に伴う遺物がなく不明である。

(中村)

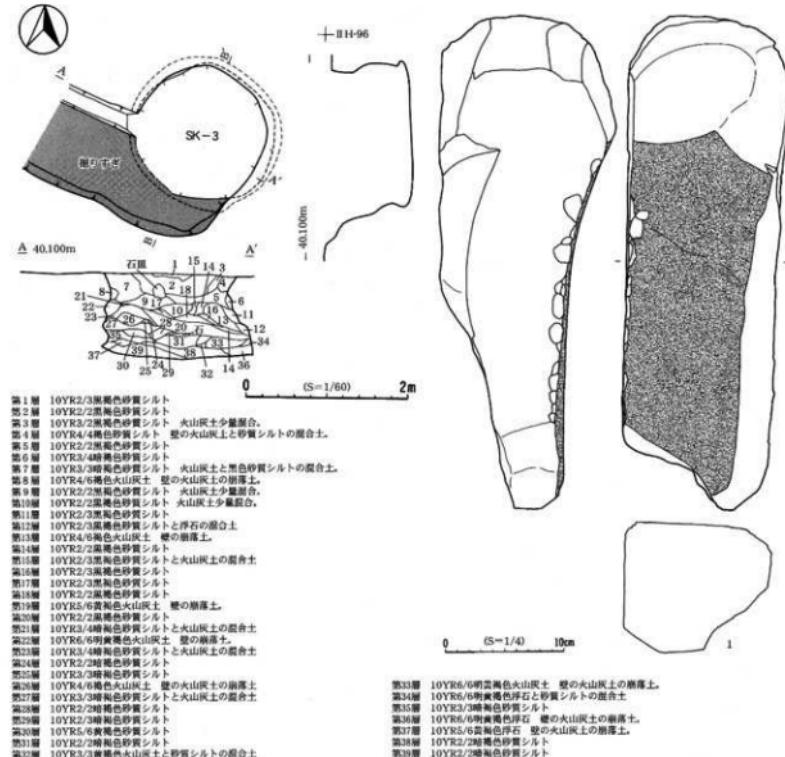


図7 SK-3

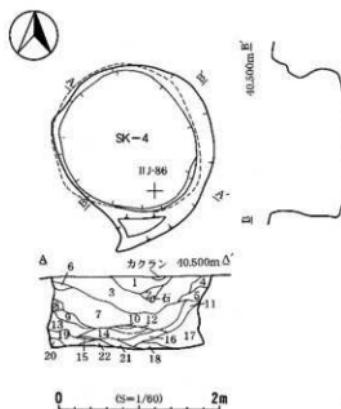


図版番号	遺構名	層位	種類	分類	計測値			石質	備考	使用 番号
					長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)			
7-1	SK-3	2	石皿		42.0	15.0	12.3	9600	砂質灰岩	i
8-2	SK-3	2-3-31	沈縫、LR縫位回転						縫方向のミガキ	
8-3	SK-3	9-20	RJ縫位回転						縫方向のミガキ	浮遊
8-4	SK-3	20	RJ縫位回転						縫方向のミガキ	鉄

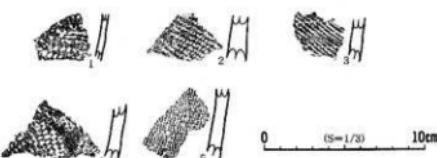
図8 SK-3出土遺物

第4号土坑(SK-4) [図9・10]

[位置・確認] I I・II J-85・86グリッドの第VI層で確認した。[形状・規模] 開口部で2m07cm、底面で1m90cmの円形を呈する。確認面からの深さは88cmである。[底面・壁] 壁は底面から内傾して立ち上がる。中位には崩落によると思われる凹凸が認められ、上位1/5程度で外傾して立ち上がる。底面はVII b層で、平坦である。溝・ピット等は認められなかった。[堆積土] 22層に分層された。基本層序第III層に類似した黒色系の砂質シルトと火山灰土からなる。火山灰土は壁際に多く認められ、崩落により堆積したものと考えられる。これらの点から本遺構は自然堆積により埋没したものと考えられる。[出土遺物] 第1層から凹石が、第1層・第3層・第4層・第7層から縄文土器の小片計12点が出土した。縄文土器片は、前期末葉かと思われるものと中期後葉かと思われるものがある。[時期] 本遺構に確実に伴うと考えられる遺物がなく不明であるが、本遺構周辺グリッドや付近の遺構の時期等を考えあわせると縄文時代中期後葉～後期初頭に属する可能性が高い。(中村)



- 第1層 10YR 3/2 黒褐色沙質シルト 小粒砂混入。固く締めている。
- 第2層 10YR 2/2 黒褐色沙質シルト 中粒砂混入。
- 第3層 10YR 2/1 黒色砂質シルト シルトの黄褐色浮石混在。
- 第4層 10YR 3/2 砂質シルト 中粒砂混入。
- 第5層 10YR 3/2 黒褐色沙質シルト 小粒砂混入。
- 第6層 10YR 2/2 砂質シルト 小粒砂の黄褐色浮石混在。
- 第7層 10YR 2/2 黃褐色沙質シルト 小2mmの黄褐色浮石混在。
- 第8層 10YR 3/2 黄褐色沙質シルト 小2mmの黄褐色浮石混在。
- 第9層 10YR 2/2 黄褐色沙質シルト 小2mmの黄褐色浮石混在。
- 第10層 10YR 2/2 黑褐色沙質シルト 表面開窓(ハマハマ山川VI層起標か?) 多量含む。壁の黒土と灰色土との混合したもの。
- 第11層 10YR 2/2 黑褐色沙質シルト 壁の黒土と灰色土との混合したもの。
- 第12層 10YR 2/2 黑褐色沙質シルト 壁土と底土の層合したもの。
- 第13層 10YR 3/4 黑褐色沙質シルト 壁土と底土の層合したもの。
- 第14層 10YR 2/2 黄褐色沙質シルト 壁の黒土と底土の層合したもの。
- 第15層 10YR 4/4 黄褐色沙質シルト 壁の黒土と底土の層合したもの。
- 第16層 10YR 2/2 黄褐色沙質シルト 壁の黒土と底土の層合したもの。
- 第17層 10YR 6/6 黑褐色沙質シルト 壁の黒土と底土の層合したもの。
- 第18層 10YR 2/2 黄褐色沙質シルト 壁の黒土と底土の層合したもの。
- 第19層 10YR 6/6 黑褐色沙質シルト 壁の黒土と底土の層合したもの。
- 第20層 10YR 5/5 黄褐色大火山灰土 壁の黒土と底土の層合したもの。
- 第21層 10YR 2/2 黄褐色沙質シルト 壁の黒土と底土の層合したもの。
- 第22層 10YR 3/3 黄褐色沙質シルト 壁の黒土と底土の層合したもの。



図版番号	遺構名	層位	外観	内面	石質	備考	使用 番号
9-1	SK-4	7	LR縫位回転	縫方向のミガキ	板		
9-2	SK-4	7	RJ縫位回転	縫方向のミガキ	縫隙		
9-3	SK-4	3	RJ縫位回転	縫方向のミガキ	縫隙		
9-4	SK-4	1	RJ,RJ縫位回転	ナデ	板		
9-5	SK-4	3	多輪縫条件回転	ミガキ	細緻		

図9 SK-4

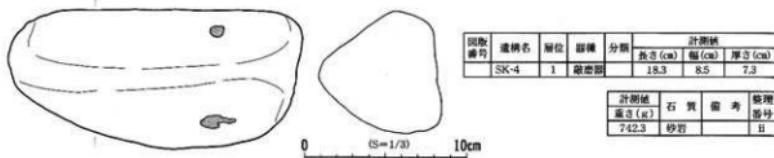


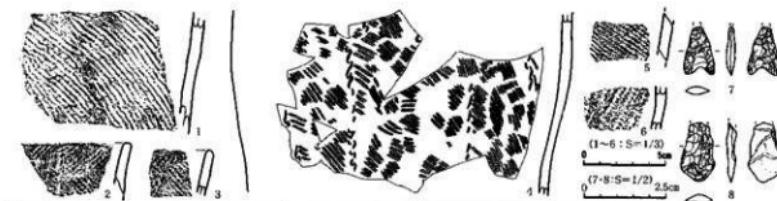
図10 SK-4出土遺物

第5号土坑 (SK-5) [図11・12]

[位置・確認] II K-86 グリッドの第VI層で検出した。[形状・規模]開口部で 2m13 cm、底面で 2m30 cm の円形を呈する。確認面からの深さは 1m28 cm である。[底面・壁]壁は底面から内傾して立ち上がる。中位には崩落によると思われる凹凸が認められ、上位 1/3 ~ 1/4 で外傾する。底面は VII b 層で平坦である。溝・ピット等は認められなかった。[堆積土] 59 層に分層された。基本層序第Ⅲ層に類似する黒色系の砂質シルトと火山灰土からなる。火山灰土は壁際に多く認められ、崩落によるものと考えられる。これらの点から本構造は自然堆積により埋没したものと考えられる。[出土遺物] 確認面より上位(おおよそ 10 cm 以内)、第 1 層・第 2 層・第 7 層・第 46 層から繩文土器片が出土した。うち、確認面より上位で出土した 1 片は第 6 号土坑の第 34 層・第 45 層、II J-85・86 グリッド II 層・Ⅲ 層から出土した土器と接合した。第 46 層から出土した土器は大木 9 式平行期から後期初頭のいずれかに属するものと思われる。確認面より上位から出土した土器は大木 10 式平行期から後期初頭のいずれかに属するものと考えられる。第 2 層・第 7 層から石器が出土した。[時期] 第 46 層出土土器の上限(最花式期)から確認面上位出土土器の下限(後期初頭)の間に属するものと考えられる。(中村)



図11 SK-5



回収番号	遺構名	層位	外 形	内 形	地 土	備 考				
12-1 SK-5		46	LR傾位凹板	縦方向のミガキ	骨					
12-2 SK-5		46	山崎式TL傾位凹板	以下LR傾位凹板	板状土によるナデ	鉄類				
12-3 SK-5		46	LR傾位凹板	縦方向のナデ	板状					
SK-5 露天面に上位、SK-6 34面、45面、59面、J185-B6、EK-86	J-II・カクラン	46	LR(末端部結節)傾位凹板							
12-4 SK-5		7	RL傾位凹板	縦方向のナデ	骨					
12-6 SK-5		7	RL傾位凹板	縦方向のナデ	骨					
回収番号	遺構名	層位	壁種	分類	空隙率	備考				
12-7 SK-5		7	石塙	2	2.0	1.3	0.4	0.7	吐黄質粉	2
12-8 SK-5		2	石塙	1	2.5	1.4	0.4	1.1	吐黄質粉	1

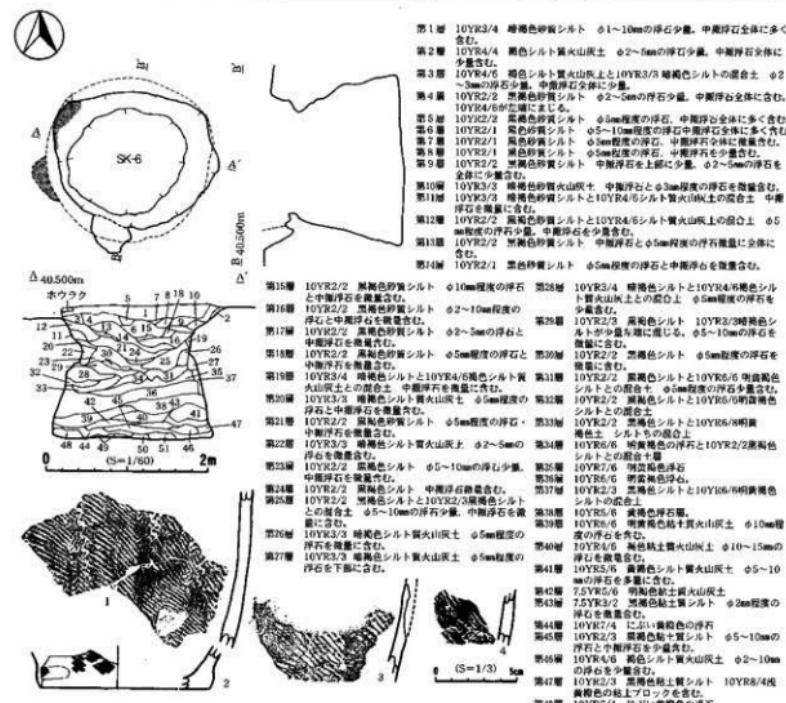


図12 SK-5 出土遺物・SK-6

第6号土坑（SK-6）【図12】

【位置・確認】II J-86 グリッドの第VI層中で確認した。[形状・規模] 磁が底面から内傾して立ち上がった後、上部1/3くらいのところでくびれて外傾するフラスコ状である。平面形は開口部で200cm×185cm、くびれ部分で140cm×130cm、底部で径200cmでほぼ円形、深さは164cmである。底面は平坦である。[堆積土] 51層に分層された。第34層までは黒褐色土と暗褐色土、第36層までは浮石層、底面までが粘土質の黄褐色土、黄橙色土を基調とする土層である。くびれ部分までの土層には中振浮石が含まれる。土層の堆積状況から自然堆積と思われる。[出土遺物] 底面壁際、第51層、第45層、第34層、16層、A層（第1～第25層）から縄文土器片が出土した。このうち、第51層・第45層・第34層から出土した破片3点は、SK-5の確認面より上位から出土した破片、及び周辺グリッドから出土した土器と接合した。出土した土器は大木10式平行期～後期初頭のいずれかに属するものと考えられる。[時期] 出土した土器から、中期末葉以降の構築と思われる。

（「出土遺物」 中村、その他 佐藤）

第7号土坑（SK-7）【図13】

【位置・確認】II K-87 グリッドに位置する。第VI層で確認した。[重複]なし。[形状・規模]開口部で2m24cm、底面で2m15cmの円形を呈し、確認面からの深さ1m18cmを計る。[底面・壁]壁は底面から内傾して立ち上がる。中位から上位に、崩落によるものと考えられる凹凸が認められ、全体に外傾する。底面は第Vb層で平坦である。溝・ピット等は検出されなかった。[堆積土]58層に分層された。基本層序Ⅲ層に類似する砂質シルトと火山灰土を主体とする。火山灰土は主に壁際に認められ、崩落によるものと考えられる。これらの点から本遺構は自然堆積により埋没したものと考えられる。他の土坑に比較して、粒子の細かな褐色味の強い層が多く認められる。特に第2・3層には褐色味の強いシルトが約1～数cmの円形の状態で黒味の強いシルトと混在する。両者の境界は明瞭な層理面をなさない（斑状構造と仮称）。斑状構造については第V章で述べる。[出土遺物]第3層から縄文土器片2点が出土した。最花式期～大木10式平行期のものかと思われる。第16層からスクレイバ一類が1点出土した。[時期]本遺構に確実に伴う遺物がなく不明である。周辺グリッドや付近の土坑から出土した遺物から考えて、大木9式平行期から後期初頭に属する可能性が高い。

（中村）

第1号溝状土坑（SV-1）【図13】

【位置・確認】II G-90 グリッドの第VI層で確認した。[形状・規模]開口部で長軸2m58cm、単軸98cm、底面で長軸2m69cm、単軸16cmを計る。確認面からの深さは1m30cmである。[壁]底面からやや外傾気味に立ち上がる。中位には崩落によると思われる凹凸が認められる。[堆積土]21層に分層された。基本層序第Ⅲ層に類似する黒色系の砂質シルトと崩落により堆積したと思われる火山灰土からなり、自然堆積により埋没したものと考えられる。[出土遺物]第1層と堆積土中位から縄文土器片2点が出土した。最花式期～大木10式平行期に属するものかと思われる。[時期]本遺構に明確に伴う遺物がなく不明である。堆積土の様相からは縄文時代前期後葉以後と考えられる。

（中村）

第1号焼土（SN-1）【図13】

II L-88に位置する。第VI層上面で赤化した部分を検出した。規模は45cm×34cmで、厚さ2cmがわずかに赤化していた。掘り込み・土の貼り付けなどは認められず、第IV層が被熱したものである。周辺でピット等の検出を試みたが、検出されなかった。時期は不明である。

（中村）

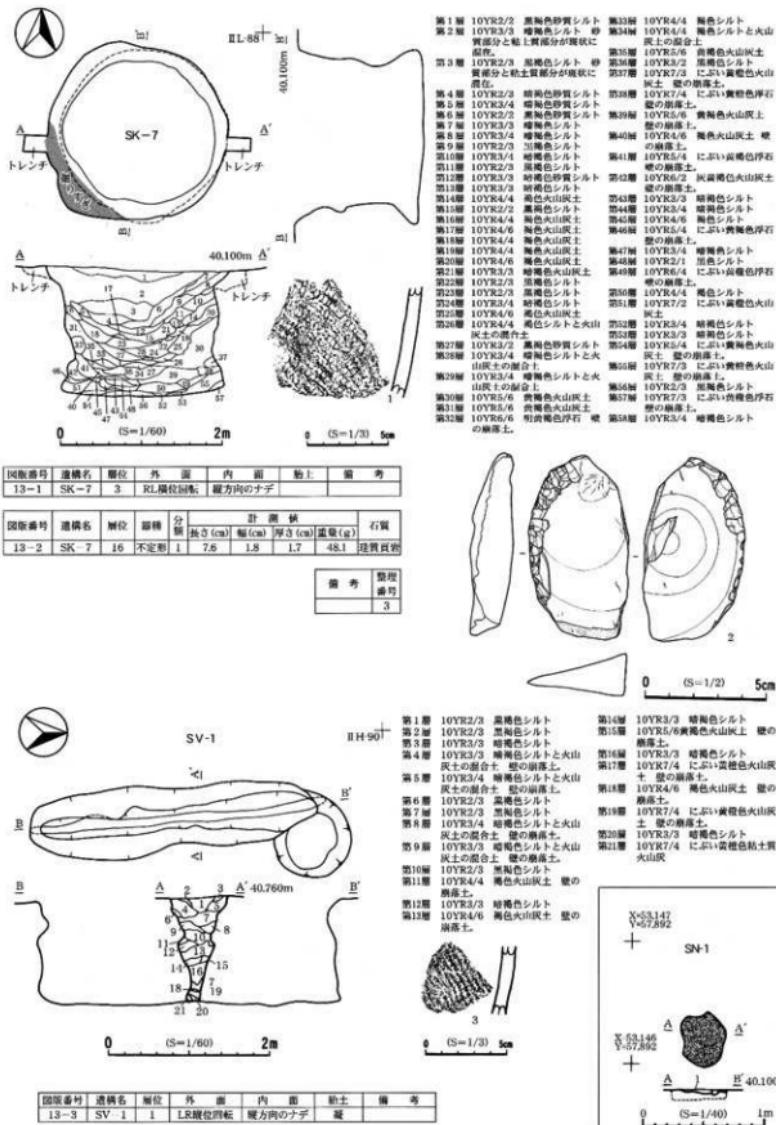


図13 SK-7・SV-1・SN-1

第4章 遺構外出土遺物

第1節 土器・陶磁器（図14～15）

平成11年度の調査では、2,880片の土器・陶磁器が出土した。99%以上が縄文土器片で、その他に土師器・須恵器、陶磁器がある。ほとんどが小片・細片で、器形が復元できたものはごくわずかであった。

縄文土器（図14-1～図15-49）

早期の土器（1） 1は爪形刺突を口縁部に平行に数段施す。白浜式である。2は外面にRL縄文を施す。胎土は緻密だが、鉱物かと思われる細かな粒子が指に引っかかり、ざらつく感じを与える。繊維は含まない。胎土の点から早期後葉かと思われる。

前期の土器（3～7） 3は結節回転文を施す。円筒下層a式である。4・5は口縁部に撚糸側面圧痕を施すもので、円筒下層d1式である。6・7は前期末に比定される。

中期後葉から後期初頭の土器（8～18） 8～10は口唇部直下に隆帯を貼り付け、隆帯と口唇の間に沈線を施す。中ノ平1式～榎林式（鈴木 1998）に比定される。11・12は地文縄文上に沈線で渦巻文を描出す。榎林式に比定される。13は突起部で、地文縄文上に沈線で曲線文を描出す。突起の頂部は若干くぼんだ平坦面をなしている。類例がなく、胎土や文様から判断すれば榎林式から最花式かと思われる。14は曲線的な沈線区画内に縄文が充填される。大木10式平行期かと思われる。15は断面が丸味を帯びた2本1組の隆帯で曲線的な文様を描出するものである。17は縦位の直線的な区画帯に縄文が充填される。18は口縁部に刻みをもった隆帯を貼り付けている。17・18は後期初頭と思われる。

後期前葉の土器（19～32） 19は小さな方形の区画が展開する。十腰内Ia式。20～24は平行沈線や曲線的な文様が展開する。25・26・28～31は胸部に鋸歯状の縄文帯が展開する。27はカニの爪状の文様が施される。25～31は十腰内Ib式である。

中期後葉～後期前葉の粗製土器（33～49） 中期後葉から後期前葉に属すると思われる縄文あるいは無文の土器を一括した。多くは中期後葉から後期初頭の幅におさまると思われるが、十腰内I式に伴うものがある可能性も否定できないので中期後葉～後期前葉とした。46～48は同一個体と思われる。剥落が激しい。胎土にイネ科植物かと思われる繊維を含んでおり、このためかとも思われる。

須恵器（図15-50） 50は底部片で、内面はナデ、外面は軽いケズリが施されている。

陶磁器（図15-51～53） 51は唐津焼の皿で、見込みに胎土目を残す。肥前1期（大橋 1989）に比定される。52は内面緑色釉、外面に鉄釉が施される。胎土は暗灰色を呈する。53は相馬焼の碗で、18世紀代のものと思われる。

第2節 石器・石製品（図16～20）

剥片石器 剥片石器は石礫15点、不定形石器等17点、フレーク類が出土した。

石礫（図16-1～15）

1類（1） 凹基無茎のもの。

2類（2～6） 尖基のもの。

3類（7・8） 凸基有茎のもの。

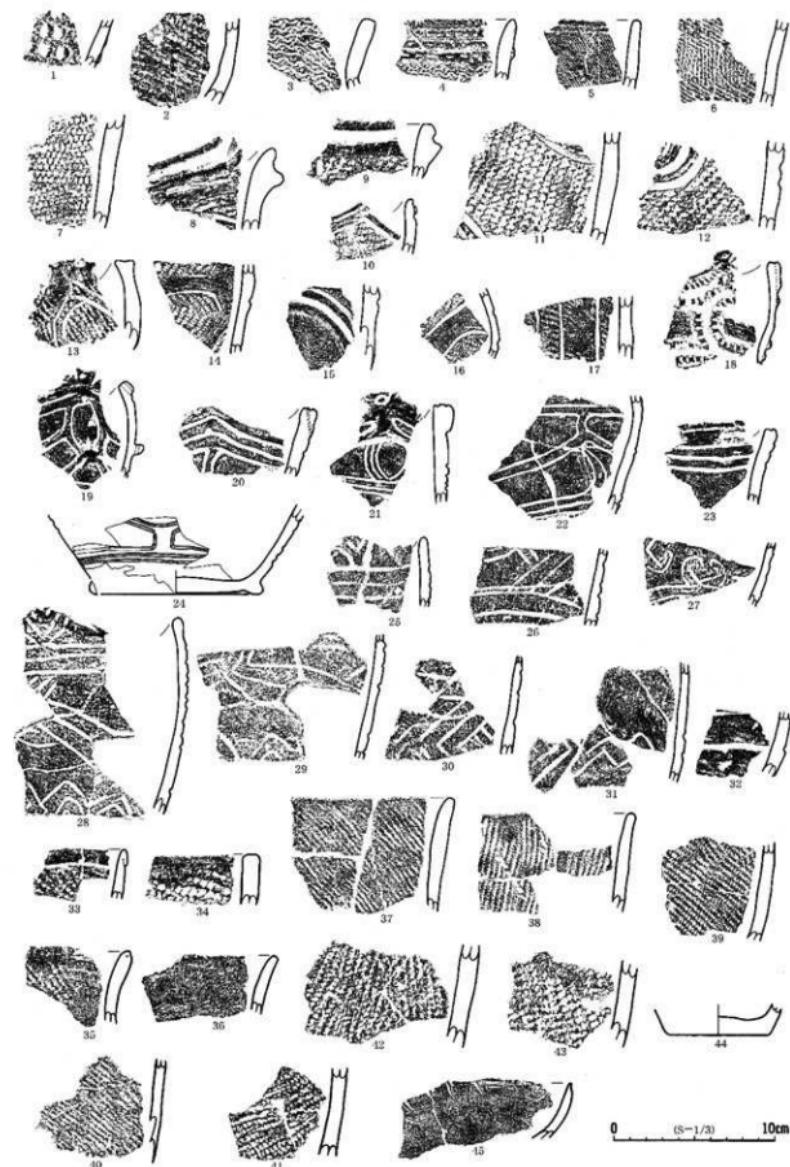


図14 遺構外出土土器（1）

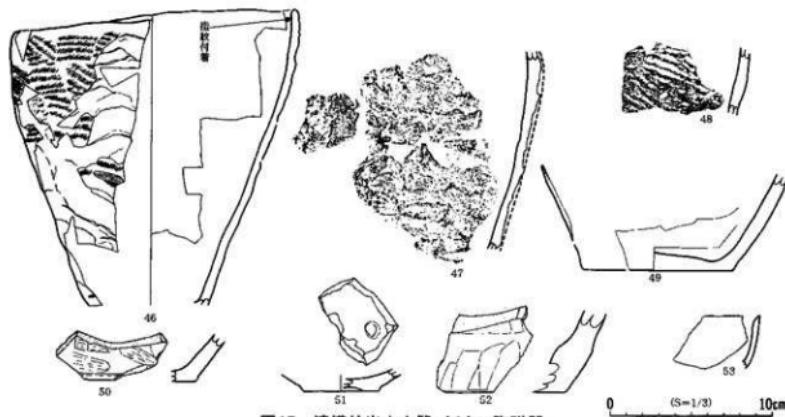


図15 遺構外出土土器(2)・陶磁器

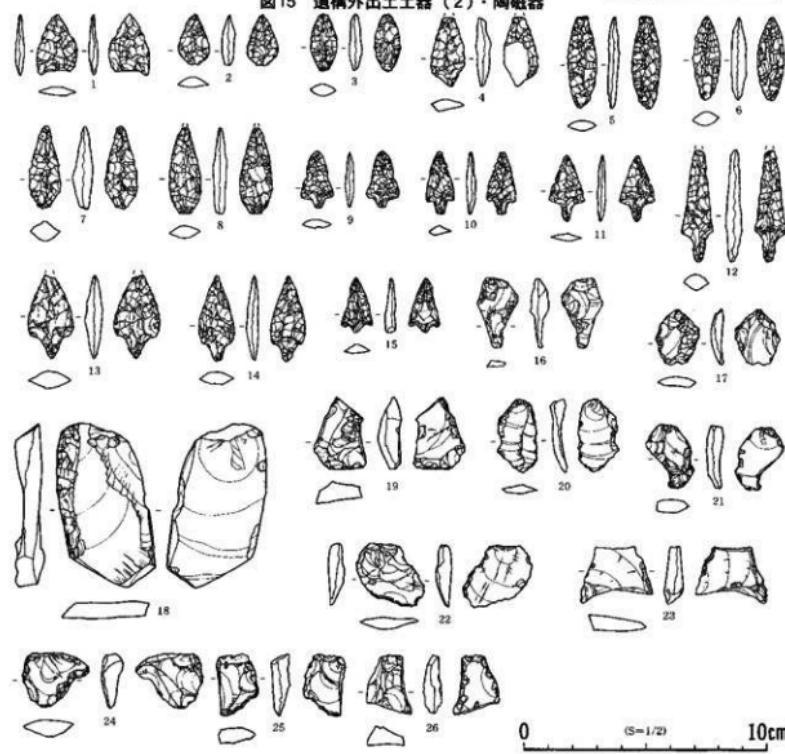


図16 遺構外出土剥片石器(1)

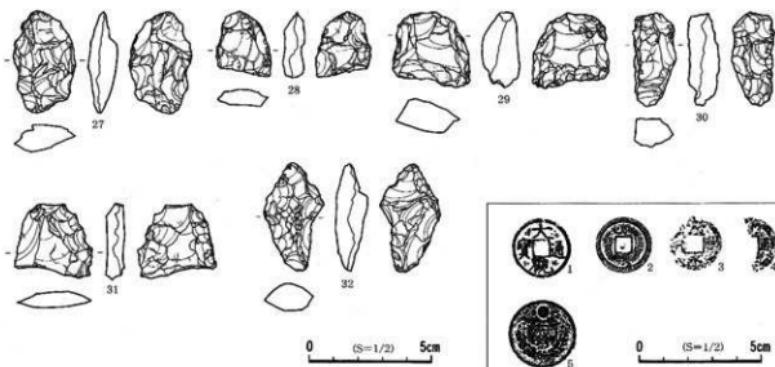


図17 遺構外出土剥片石器(2)・遺構外出土鉄貨

4類(9~14) 平基有茎のもの。 13は他と比較して大きな剥離面が目立つ。

5類(15) 凹基有茎のもの。 15は主要剥離面を残している。

不定形石器(図16-16~26)

1類(16~21) スクレイバー類 18は縦長の剥片の一側縁に二次加工が施されている。19は打点から遠い側の側縁に両面から二次加工が施される。

2類(22~26) 側縁に連続した刃こぼれ状の剥離のあるもの

二次加工のある剥片(図17-27~32)

(中村)

礫石器(図18~図20)

礫石器はすり石8点、敲き石9点、すり・敲き双方の痕跡を持つもの3点、凹み石2点、半円状扁平打製石器3点、石皿1点、砥石2点、台石1点、磨製石斧3点が出土している。

1 すり石

器体にすった痕跡を持つものをここにまとめたが、すっている位置と器体の形によって以下のように細分される。

1-a類：礫の広い面をすっているもの(図18-1)。

1は肉厚な円礫の平坦な部分を利用している。図示してはいないが、整理番号19は被熱により、礫の大部分が欠損している。(以下、数字の前に「整理番号」と付されているものは実測図を掲載しなかったものである。)

1-b類：球状の礫をすっているもの。

整理番号4は球状の礫の表面を一部利用している。

1-c①類：礫の側縁・側面・稜線部をすっているもの(図18-2・3)。

2は楕円形の礫の二側面を利用している。3は一方の側縁にすっている面(以下、スリ面とする)が、もう一方の側縁には敲打の痕が見られる。スリ面は大部分が打ち欠かれている。また、両端部に潰した痕が見られる。整理番号15は礫の一稜を利用している。

1-c ②類：断面が三角形をした稜の一稜をすっているもの（図 18-4・5）。

4・5とも稜の一稜をすっているが、5は端部に敲打痕、背面に溝・傷を伴うスリ面も見られる。

2 破き石

器体の表面に敲いた痕跡を持つものをここにまとめたが、敲いている位置によって次のように細分される。

2-a 類：稜の広い面を敲いているもの（図 18-6・7）。

6は稜の平坦な面の中央部と一力所の頂部を敲いている。平坦面に凹みが認められるが、かなり浅いので敲き石に分類した。7は表裏両面の中央部に敲いた痕跡が見られる。

2-b 類：稜の側縁・側面・稜を敲いているもの（図 18-8・図 19-9・10）。

8は扁平で厚みのある円錐のほぼ全周を敲打している他、部分的にすった痕も見られる。9は稜の幅の狭い方の縁辺を使用している。10は稜の頂部から二稜にかけての部分を使用している。整理番号 20 も 9 と同様の特徴を持ち、整理番号 14 は稜の一稜が利用されている。

2-c 類：稜の端部を敲いているもの（図 19-11・12）。

11は棒状の稜の両端部と側縁の一部を使用している。12は橢円形の稜の上端と下端を敲打し、下端には潰れた部分も見られる。また、稜の側縁から下端にかけて細かい擦痕が残る。

3 シリ・敲き双方の痕跡を持つもの（図 19-13・14）

13は棒状の稜の側縁と下端を使用し、側縁ではシリの後に敲打している。また下端は主に敲打しているが、一力所に強くすった面がある。14は扁平な稜の平坦な部分に敲いた痕と擦痕が見られる。整理番号 26 は扁平な円錐の周縁に敲いた痕、一部にすった痕が見られる。

4 凹み石（図 19-15・16）

15の背面には、正面の凹みのほぼ裏側の位置に敲いた痕が見られる。16は表裏両面を使用し、一侧面に擦痕が見られる。

5 半円状扁平打製石器（図 20-17・18）

17は器体の表面を大きく剥離した後、周縁を小さい剥離や細かい敲打によって加工している。18は石質・扁平な稜の側縁を加工して直線的な機能面を作り出している点からここに分類したが、敲き石としても分類できるものである。整理番号 30 も同じ理由で本類に分類した。

6 石皿（図 20-19）

19は破片が出上している。厚みのある板状の稜の一面を機能面としている。

7 砕石（図 20-20・21）

20は棒状の稜の二面を、21は扁平な稜の全側面と正面の一部を使用している。

8 台石

整理番号 8 は自然の稜のやや平坦な部分に敲いた痕が見られるものである。

9 磨製石斧（図 20-22・23・24）

22・23はいずれも刃部のみが出土している。24は小型で、敲いた痕が全体に残り、丁寧な仕上げをしないまま使用している。

石製品（図 20-25・26・27）

石製品は石棒 1 点、用途不明のもの 1 点、石刀 1 点が出土している。

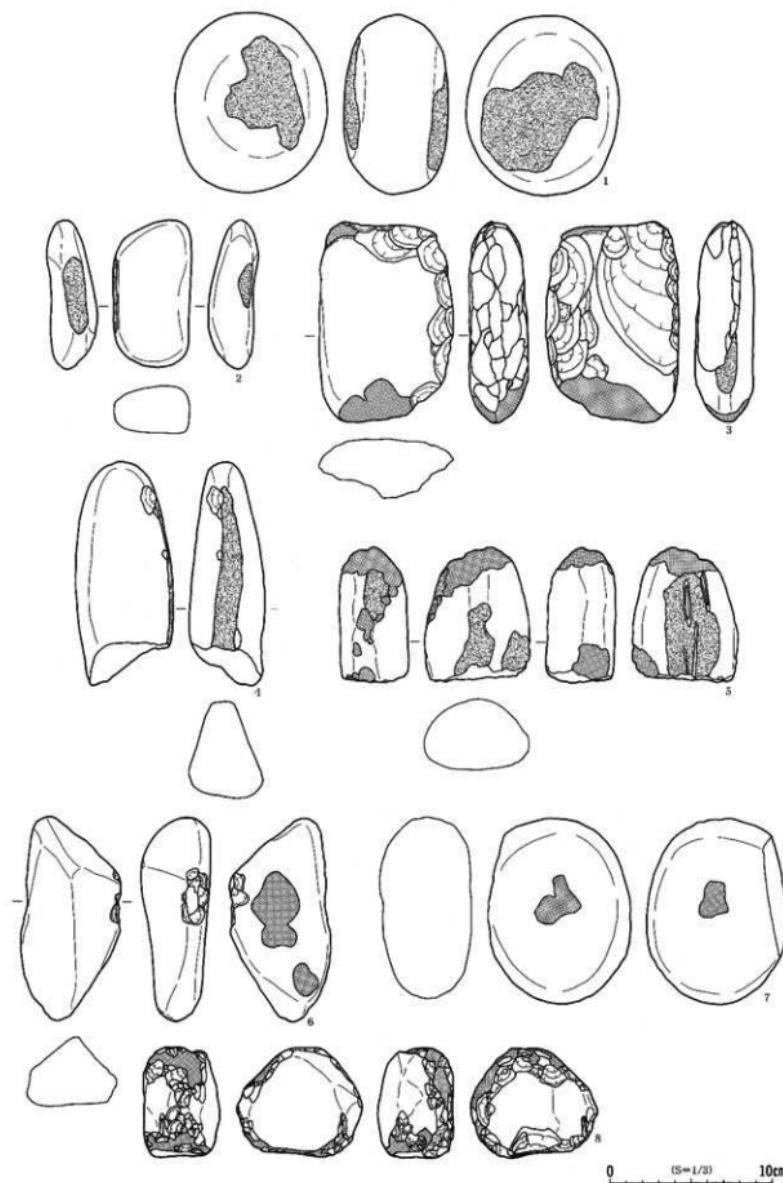


図18 遺構外出土砾石器（1）

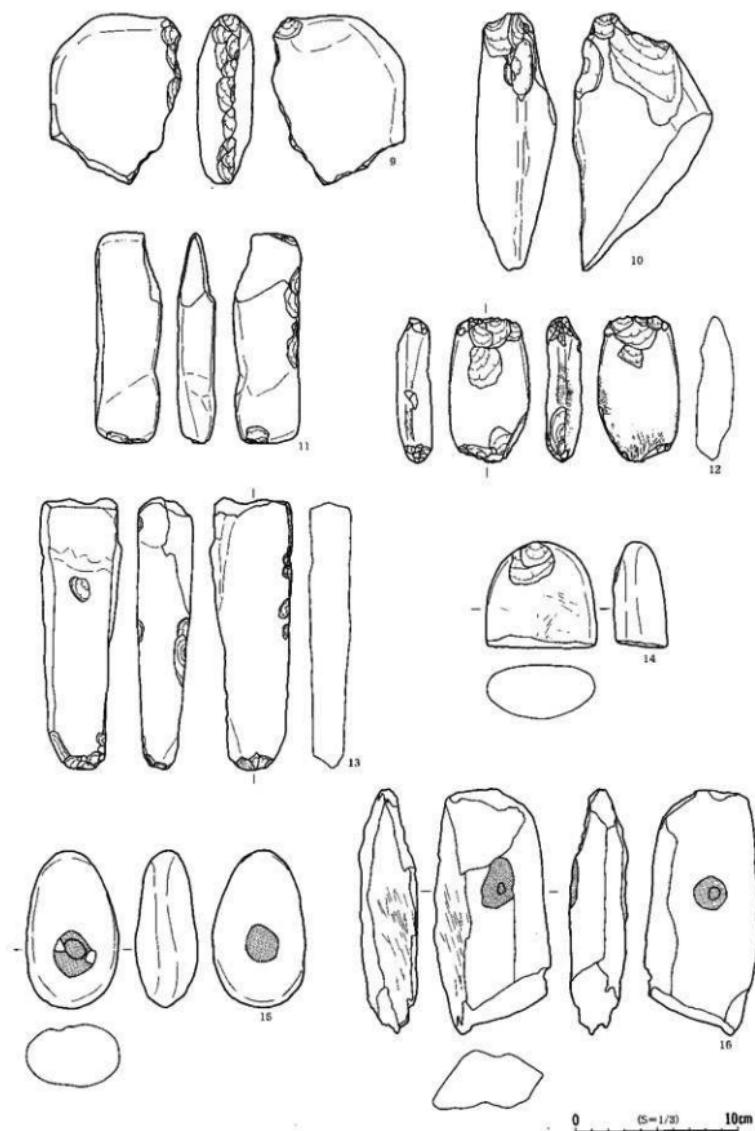


図19 遺構外出土礫石器（2）

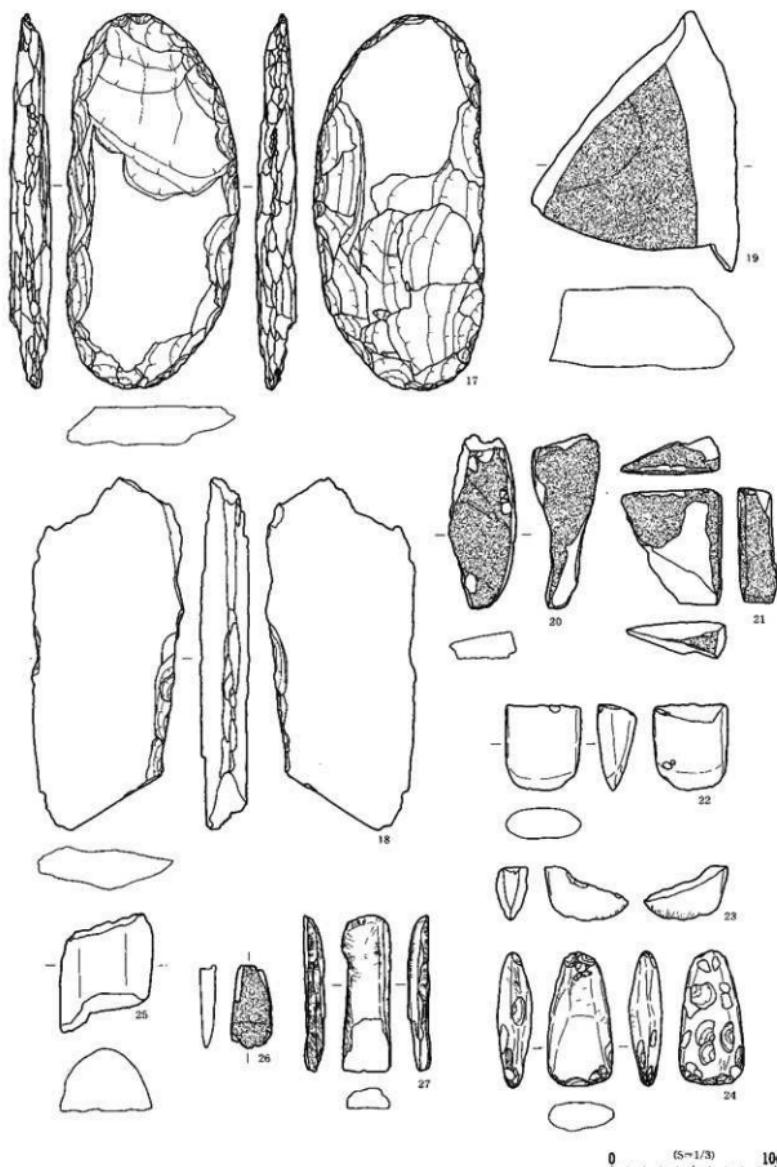


図20 造構外出土石器（3）・石製品

25は石棒の破片で、全面が強くすらされている。26は製作途中の石製品と思われるが、用途は不明である。27は石刀の柄で、整形のためにすった痕跡がとくに側面に顕著に残っている。

(佐藤)

第3節 その他の遺物

銭貨（図17）

銭貨が5枚出土した。銭種と数量は、大觀通寶（1枚）、寛永通寶（新寛永：銅 1枚：、鉄一文：1枚）、銭種不明（1枚）、一銭（銅 1枚）である。

鐵滓

調査区西半部を中心に鐵滓が計872g出土した。本遺跡調査区から西方約250mで製鉄炉が検出されており（青森県教育委員会 1988）、これとの関連で理解される。

(中村)

遺構外出土土器

回取番号	出土位置	層位	外 面	内 面	胎 土	備 考
14-1	IIK-92	Ⅲ	爪形刺突	縦方向のミガキ	岩凝灰	
14-2	III-L-81	Ⅱ	LR斜位回転	ナデ	骨凝灰	
14-3	IIK-76	IV	筋跡回転文	横方向のミガキ	鐵	
14-4	III-L-80	I	竿跡or莊目、幕紋工具による鉋突、筋跡回転文	横方向のミガキ	骨凝灰	口唇部LR回転
14-5	II-G-83	Ⅲ	L側面仕上・縦位回転、筋跡回転	横方向のミガキ	岩凝灰	
14-6	II-M-92	Ⅲ	RL横位回転、単鍛錠全体I RD-L横位回転		鐵浮	
14-7	II-M-97	カクラン	多輪轍条体		鐵浮	
14-8	II K-84	Ⅲ	RL縦位、沈縫		骨岩浮	
14-9	II-J-80	I	RL縦位、沈縫		鐵	
14-10	II-N-100	Ⅲ	LR縦位、沈縫	横、斜方向のナデ	浮凝	口唇部隆起點付
14-11	II-H-82	Ⅲ	RLR縦位、沈縫	横方向のミガキ	骨凝灰	
14-12	II-F-72	Ⅲ	RLR縦位回転	斜方向のナデ	骨鐵凝	
14-13	II-L-81	Ⅲ	LR回転、沈縫		骨鐵凝	
14-14	II-L-86	Ⅱ	沈縫、RL丸塊	縦方向のミガキ	浮凝	
14-15	II-L-93	Ⅲ	略帶		浮凝	
14-16	II-M-88	Ⅲ	LR光面	横方向のミガキ	凝	
14-17	II-I-86	Ⅲ	沈縫、LR縦位		骨鐵浮	
14-18	II-L-88	Ⅲ	隣帯上刻み	横方向のナデ	凝	
14-19	II-L-87	Ⅱ	沈縫、赤色墨影	横方向のミガキ、赤色墨影	凝浮雲	
14-20	II-G-85	カクラン	沈縫	横方向のミガキ	浮	
14-21	II-L-87	Ⅱ	沈縫	横方向のナデ	凝	
14-22	II-G-85	カクラン	沈縫	横、斜方向のナデ	岩鐵凝灰	
14-23	II-F-85	Ⅱ	沈縫	横、斜方向のミガキ	岩凝灰	
14-24	II-F-G-85	II-カクラン	沈縫	横方向のナデ	岩鐵凝灰	
14-25	II-H-87	カクラン	沈縫		浮	
14-26	II-H-87	カクラン	沈縫(磨滅)		凝	
14-27	II-M-86	Ⅲ	沈縫、LR光面	ナデ	骨浮	
14-28	II-H-87	カクラン	沈縫、L充填	上半横、下半縦のナデ	凝浮	
14-29	II-H-87	カクラン	沈縫、L充填	縦方向のナデ	骨浮凝	
14-30	II-H-87	カクラン	沈縫、L充填		凝	
14-31	II-B6 II-H-87	カクラン	沈縫、L充填	縦方向のナデ	岩骨	
14-32	II-H-87	カクラン	沈縫	横方向のナデ	骨鐵	
14-33	II-K-83	I	折返口線、LR縦位回転		骨	
14-34	II-I-87	II	LR縦位	横方向のナデ	骨岩	
14-35	II-L-94	Ⅲ	LR縦位回転		骨岩	
14-36	II-M-87	Ⅱ	横方向のナデ	横方向のナデ	浮	
14-37	II-M-88-89	II・Ⅲ	L縦位	縦方向のナデ		
14-38	II-B6-87	カクラン・II	KL斜位回転	1.1cm横ナデ以下縦ナデ	凝	
14-39	II-H-87	カクラン	LR縦位回転	縦方向のナデ	鐵凝	

回収番号	出土位置	層位	外 面	内 面	胎 土	備 考
14-40	II M-88	III	L縦位回転			
14-41	II N-102	カクラン	RL縦位		骨浮	
14-42	II J-85 II M-86	カクラン-III	RL縦位		骨鉄浮	
14-43	II K-83	I	RLR縦位	斜方向のナデ	岩骨	
14-44	II M-100	III	ナデ	ナデ	鉄骨	
14-45	II C-83	III	磁力向のミガキ	磁力向のナデ	岩	
15-46	II J-85 II J-86 II L-88	II-III	L縦位回転、剥落顯著	ナデ、指紋あり	鐵骨鉄凝	47-48と同一個体
15-47	II L-88	III	剥落顯著	ナデ	凝	46-48と同一個体
15-48	II J-85	III	L縦位回転	磁力向のミガキ	鐵骨浮	47-48と同一個体
15-49	II M-80 II M-99+100 II N-97	III-V	L縦位回転	ナデ	鉄浮	
15-50	II F-76	II	輕いケズリ	ナデ	凝	
15-51	II L-83	I	無隙	約十口		
15-52	II L-85	I	褐色を呈する。ヘラ状工具によるナデ。	褐色	灰色を呈する。成形は積み上げによる。	
15-53	II R-75	II	白釉	内輪		

造構外出土剥片石器

回収番号	出土位置	層 位	器 種	分 類	計 測 値				石 質	備 考	整理 番 号
					長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)			
16-1	II K-91	III	石盤	I	2.5	1.7	3.5	1.2	珪質頁岩		1
16-2	II L-84	I	石盤	2	2.1	1.3	5.0	1.1	珪質頁岩		6
16-3	II M-88	III	石盤	2	2.4	1.1	6.0	1.2	珪質頁岩		12
16-4	II N-97	V	石盤	2	2.9	1.5	0.6	1.8	珪質頁岩		5
16-5	II M-99	III	石盤	2	3.8	1.2	4.0	1.8	珪質頁岩		9
16-6	II M-92	III	石盤	2	3.4	1.2	0.6	2.1	珪質頁岩		10
16-7	II Q-107	I	石盤	3	3.4	1.4	0.9	2.9	珪質頁岩		7
16-8	II I-103	カクラン	石盤	3	3.6	1.3	6.0	2.3	珪質頁岩		14
16-9	II M-83	I	石盤	4	2.3	1.4	3.5	0.7	珪質頁岩		2
16-10	II Q-105	I	石盤	4	2.5	1.2	4.0	0.8	珪質頁岩		3
16-11	II K-82	I	石盤	4	2.7	1.5	4.0	0.8	珪質頁岩		4
16-12	II G-86	I	石盤	4	4.6	1.4	0.7	2.5	珪質頁岩		15
16-13	II H-87	カクラン	石盤	4	3.5	1.9	0.7	3.1	珪質頁岩		8
16-14	II K-83	II	石盤	4	3.5	1.5	5.0	2.0	珪質頁岩		13
16-15	II M-90	III	石盤	5	2.3	1.3	0.4	0.7	珪質頁岩		11
16-16	II J-88	カクラン	不定形	1	2.9	1.7	0.8	2.1	珪質頁岩		16
16-17	II P-71	II	不定形	1	2.3	1.8	0.5	1.8	珪質頁岩		27
16-18	II J-85	III	不定形	1	6.8	4.1	1.2	31.9	珪質頁岩		28
16-19	II J-79	III	不定形	1	3.0	2.3	1.0	5.8	珪質頁岩		18
16-20	II C-83	II	不定形	1	3.0	1.7	0.7	1.8	珪質頁岩		25
16-21	II K-82	I	不定形	1	2.6	2.9	0.7	2.8	珪質頁岩		30
16-22	II M-84	I	不定形	2	2.6	2.8	0.7	3.7	珪質頁岩		22
16-23	II L-88	II	不定形	2	2.3	3.0	0.8	4.0	珪質頁岩		31
16-24	II F-85	I	不定形	2	2.2	2.8	0.9	4.0	珪質頁岩		32
16-25	II F-72	II	不定形	2	2.5	1.8	0.8	2.8	珪質頁岩		23
16-26	II K-83	II	不定形	2	2.4	1.9	0.8	3.1	珪質頁岩		17
17-27	II G-90	カクラン			4.2	2.6	1.2	9.8	珪質頁岩		33
17-28	II L-92	カクラン			2.7	2.3	0.9	5.4	珪質頁岩		20
17-29	II I-87	カクラン			3.1	3.2	1.6	14.7	珪質頁岩		21
17-30	II K-85	I			3.9	1.8	1.3	9.0	珪質頁岩		36
17-31	II L-90	III			3.2	3.3	0.8	7.7	珪質頁岩		19
17-32	II Q-106	I			4.5	2.5	1.3	10.4	珪質頁岩		32

遺構外出土器物・石製品

図版番号	出土位置	層位	器種	分類	計測値				石質	備考	整理番号	
					長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)				
18-1	II B-83	Ⅲ	すり石	I a	11.0	9.4	6.7	676.9	ひん岩		6	
					II K-87	カクラン	すり石	I a	(6.1)	(6.7)	(5.4)	粗粒砂岩
					II F-85	II	すり石	1 b	(7.6)	(6.3)	(4.1)	ひん岩
18-2	II C-83	Ⅲ	すり石	I c -①	9.1	4.8	2.9	103.5	砂岩		13	
					II K-88	カクラン	すり石	I c -①	(10.7)	(6.0)	(5.7)	189.1 細粒砂岩
					II J-87	カクラン	すり石	I c -①	12.3	8.3	3.6	307.8 細色凝灰岩
18-3	II H-86	カクラン	すり石	I c -①	(13.7)	6.0	4.5	236.9	砂岩		27	
18-4	II J-87	カクラン	すり石	I c -②	(8.3)	6.5	4.3	210.1	凝灰質砂岩		12	
18-5	II L-89	カクラン	すり石	I c -②	11.4	(8.7)	5.7	484.6	凝灰岩		18	
18-7	II K-87	カクラン	敲き石	2 a	12.5	(6.2)	4.1	133.9	砂岩		28	
18-6	II K-89	II	敲き石	2 a	12.5	6.2	4.1	204.5	砂岩		22	
	II K-87	カクラン	敲き石	2 b	10.9	5.3	6.2	204.5	砂岩	被熱	14	
II L-84	II	敲き石	2 b	(7.7)	2.8	6.7	61.3	珪質頁岩			20	
19-9	II G-75	I	敲き石	2 b	(10.4)	8.2	3.5	168.6	砂岩		17	
19-10	II P-85	II	敲き石	2 b	15.8	8.6	4.9	376.2	砂岩		21	
19-8	II L-87	Ⅲ	敲き石	2 b	6.7	7.7	4.8	208.0	珪質頁岩	被熱	29	
19-11	II K-87	カクラン	敲き石	2 c	12.9	(4.1)	2.3	93.7	頁岩		23	
19-12	II K-83	II	敲き石	2 c	8.9	5.0	2.3	54.2	珪質頁岩		24	
19-14	II M-87	Ⅲ	すり・敲き	3	(6.5)	6.8	3.4	156.2	緑色凝灰岩		1	
19-13	II B-83	II	すり・敲き	3	(16.7)	5.1	2.5	143.1	頁岩		25	
II J-87	カクラン	すり・敲き	3	8.5	7.2	1.0	53.8	粘板岩		26		
19-15	II O-107	Ⅲ	凹み石		9.6	5.8	4.2	112.4	縞状砂岩		33	
19-16	II I-86	II	凹み石		(15.0)	7.3	3.4	216.0	粘板岩		34	
II K-88	カクラン	半円状		(16.8)	(7.9)	1.8	164.4	粘板岩		30		
20-18	II J-87	カクラン	半円状		21.5	9.3	3.0	323.2	粘板岩		31	
20-17	II H-86	カクラン	半円状		22.9	10.5	2.3	444.3	粘板岩		32	
20-19	II M-89	Ⅲ	右巻		(16.0)	(12.7)	5.9	708.4	凝灰岩		7	
20-20	II J-87	カクラン	紙石		10.6	4.2	4.1	105.9	砂岩	被熱	38	
20-21	II K-87	カクラン	紙石		(7.0)	(6.1)	(2.3)	41.8	砂岩		40	
II H-87	カクラン	台石			23.3	9.5	6.5	731.6	緑色凝灰岩		8	
20-23	II Q-107	I	磨斧		(3.3)	(5.1)	(1.9)	9.0	頁岩		35	
20-24	II J-87	カクラン	磨斧		8.1	4.0	2.0	44.3	砂岩		36	
20-25	II G-82	I	磨斧		(5.3)	(4.6)	(1.9)	44.4	縞状砂岩		37	
20-26	II K-88	カクラン	石製品		(7.3)	(5.7)	(3.8)	109.1	珪質頁岩		3	
20-26	II M-93	Ⅲ	石製品		(5.0)	2.5	10.0	9.7	粘板岩		39	
20-27	II F-87	カクラン	石製品		(9.5)	3.0	1.2	26.2	粘板岩		41	

遺構外出土銭貨

図版番号	出土位置	層位	錢種	時代	初期年	備考
17-1	II K-83	I	大振通寶	北宋	1107	
17-2	II Q-109	II	寛永通寶	江戸		銅錢
17-3	II N-99	カクラン	寛永通寶	江戸		銅錢
17-4	II Q-108	I	寛永通寶?			銅錢
17-5	II L-92	Ⅲ	一錢	明治十年		

第5章　まとめ

今回の調査では土坑が7基、溝状土坑1基、焼土1基が検出された。溝状土坑と焼土の時期は不明である。土坑はいわゆるフラスコ状土坑で、時期が推定できるものは、周辺や構造内から出土した土器から、縄文時代中期後葉～後期初頭に属するものと考えられ、その他のものも同じ時期に属する可能性が高い。5基が半円形に配置されていた。調査区内に住居跡やその他の遺構は検出されず、遺物の分布も希薄であった。2~300m南では、榎林式期～最花式期にかけての集落の一部が発掘調査されており、住居跡・墓・貯蔵穴・捨て場などが複雑に重複している。これらのことから、今回の調査区は松ヶ崎・西長根遺跡の外縁部に当たるものと考えられ、遺跡の範囲・空間利用の一端が明らかになったといえる。

より微視的な問題に視点を転じれば、半円形に並んだフラスコ状土坑の配置が注目される。半円形に並んだフラスコ状土坑は、同時存在か否かという点が問題となる。今回の調査ではこれを直接的に証明する根拠は得られなかった。

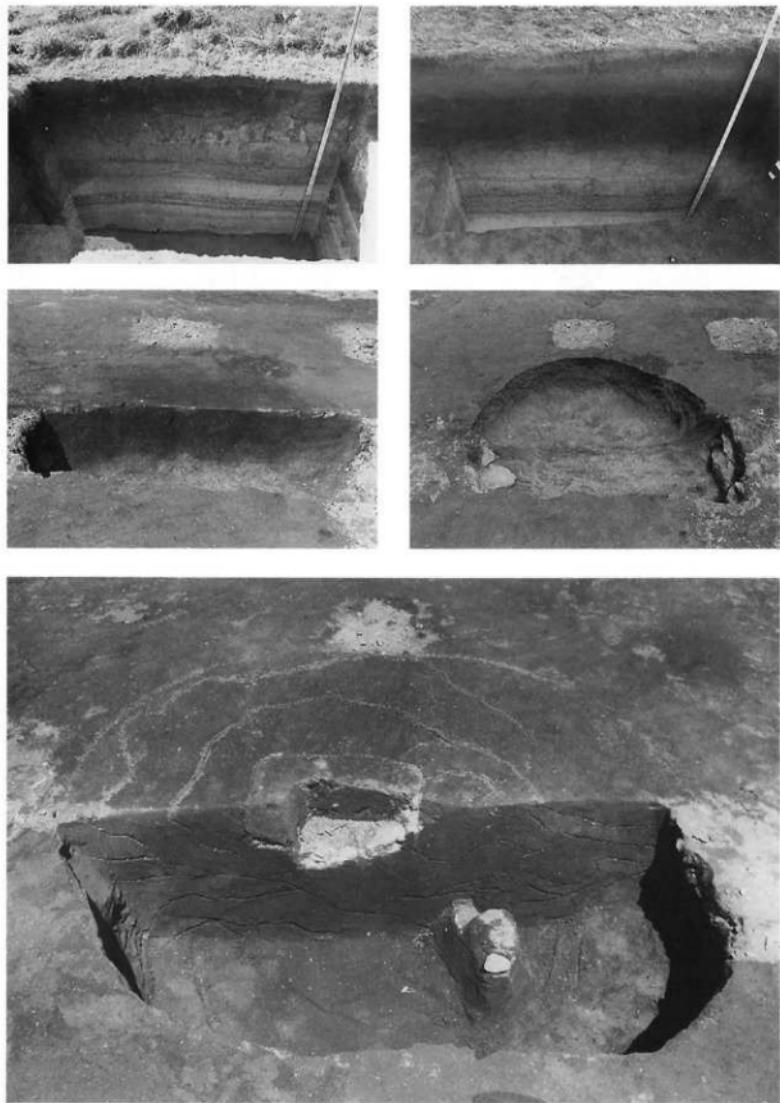
SK-5・6で遺構間接合した土器片の例はあるが、周辺グリッドの土器とも接合しており、土器が使用されなくなつて後、それぞれの破片がどのような過程を経て、いつの時点で土坑に流れ込んだのか把握することは困難である。

土器の遺構間接合以外に手掛かりとなる可能性をもつのは堆積土の様相であると筆者は考える。いずれの土坑も自然堆積と考えられたが、他と異なってSK-7のみに斑状構造が認められた（第3章参照）。斑状構造は、砂質シルトより粒子の細かいシルト（SK-7ではその土色から第VI層：いわゆるローム；由来する可能性がある）が、互いに（断面における形状は）円形のまとまりを持ちながら、その境界は明瞭な層理面をなさないものである。遺構以外で筆者が確認できた例は、谷地形に面した斜面やごく小規模な埋没谷の、粒子の細かな粘性のある暗褐色シルト層とその上位の砂質シルト層の境界付近においてである。確認できた地形から、水流に何らかの関係があるのではないかと考えている。だとすれば、SK-7では約50cmの厚さの土層が水流の影響下に堆積したことになり、累積で相当の水量が必要であった可能性が高く、SK-7の埋没が他と異なる環境下で進行した可能性は考えられて良い。「異なる環境」は①土坑埋没時の時間差、すなわち季節や一時的な気象条件など、時間的に限定されて生じた環境を念頭に置いている。しかし、堆積土の様相の差・環境の差は理論上②当時の生活面での開口部から数m以内の微地形・植生に規定される水の流れや堆積土の供給源となる土壌の露出状況③①と②両者の複合、を反映している可能性も否定できない。

斑状構造の成因が水流に關係していた場合でも、土坑が同時存在したか否かを検証するにはなお②③の問題を解決しなければならず、堆積土の様相の差を時間差として捉えるのにはかなりの困難が伴う。しかし、土坑堆積土のパターン化とその成因を追求することは、土坑そのもののパターン化にもつながり、重複関係や出土遺物の接合関係などと組み合わせることで時間性を検討する材料となる可能性があろう。堆積土に斑状構造を有する遺構は筆者の知る限り、本遺跡に限らず青森県南部地方の火山灰性の台地上に認められるようであり、これを検討する意味は十分にあると考える。そのためには土壤の粒径分析など堆積学的な分析も必要となろう。

(中村)

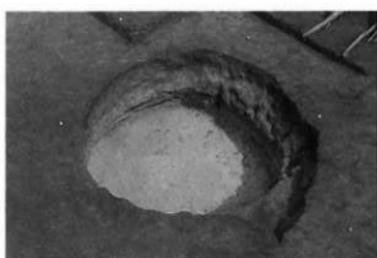
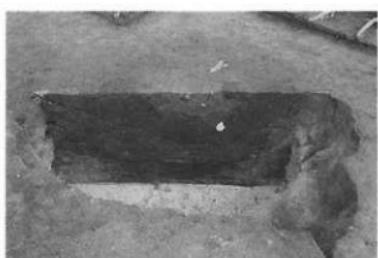
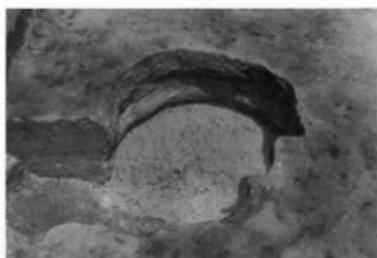
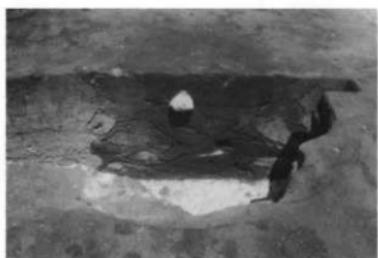
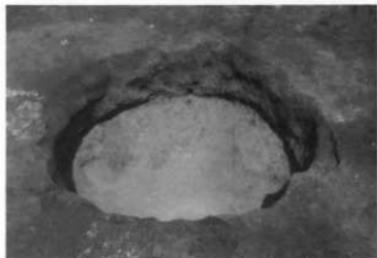
写 真 図 版



1 基本層序
2 基本層序

3 SK-1 土層堆積状況（南西から）
4 SK-1 完層状況（南西から）

5 SK-2 精査状況
(南から)



1	2
<hr/>	
3	4

6	7
<hr/>	
8	9
<hr/>	
10	11

- 6 SK-2 土層堆積状況（南から）
7 SK-2 完掘状況（南から）
8 SK-3 土層堆積状況（南から）
9 SK-3 完掘状況（南から）
10 SK-4 土層堆積状況（南西から）
11 SK-4 完掘状況（南西から）

写真図版 1

写真図版 2

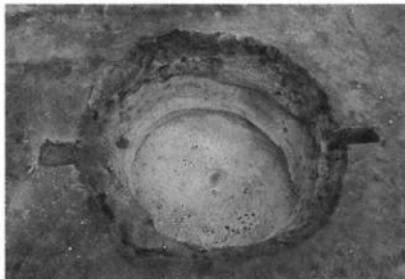
写真図版 2



12 SK-5土層堆積状況（南から）
13 SK-5完掘状況（南から）

14 SK-6 土層堆積状況（南西から）
15 SK-6 完掘状況（南から）

16 SK-7土層堆積状況（南から）



17 SV-1 土層堆積状況
(南から)

18 SV-1 土層堆積状況
(南から)

19 SV-1 完掘状況
(南から)

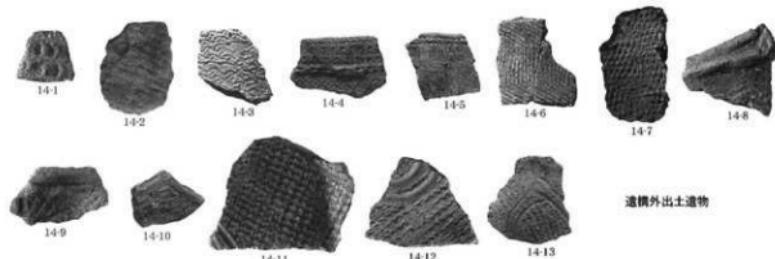
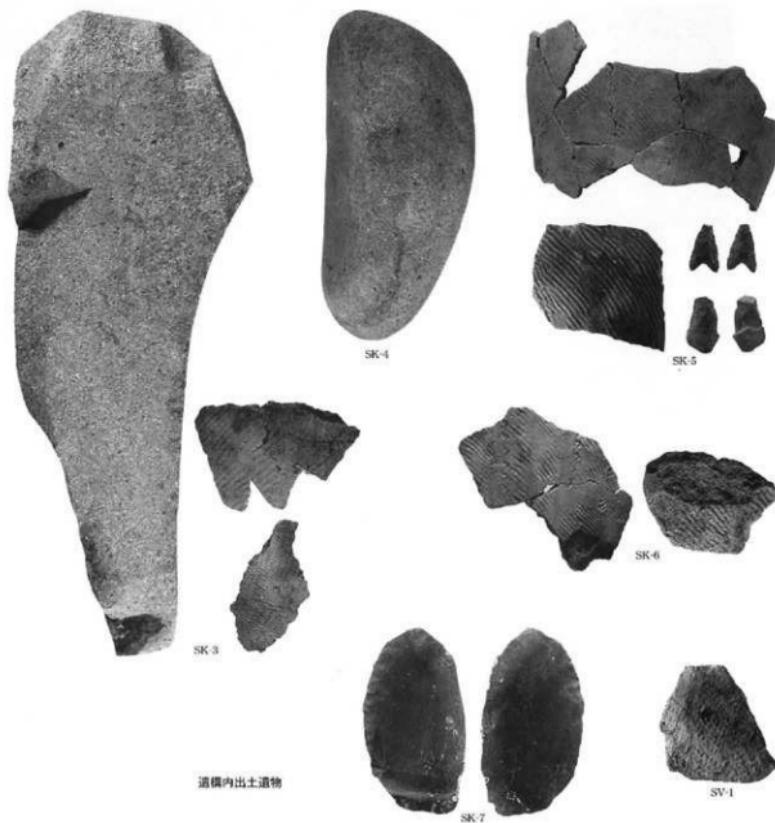
20 SK-7 完掘状況
(南から)

12	13
14	15
<hr/>	
16	
<hr/>	

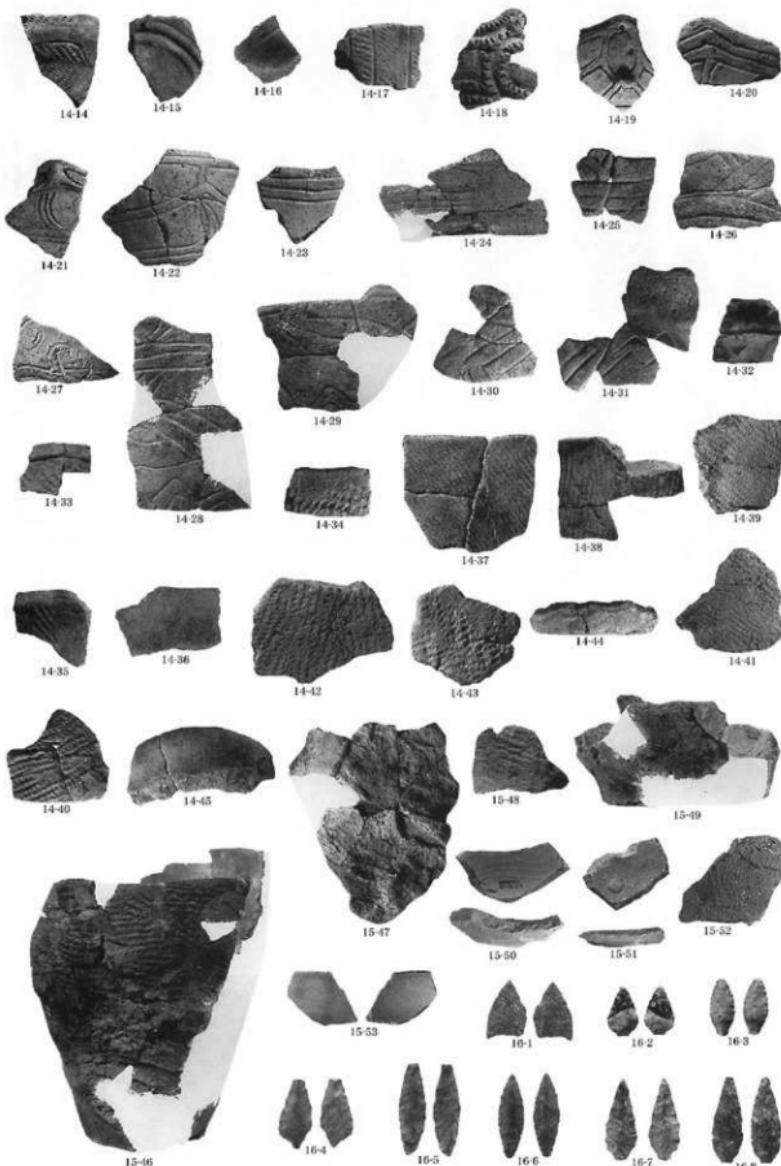
写真図版3

17	18
19	
<hr/>	
20	
<hr/>	

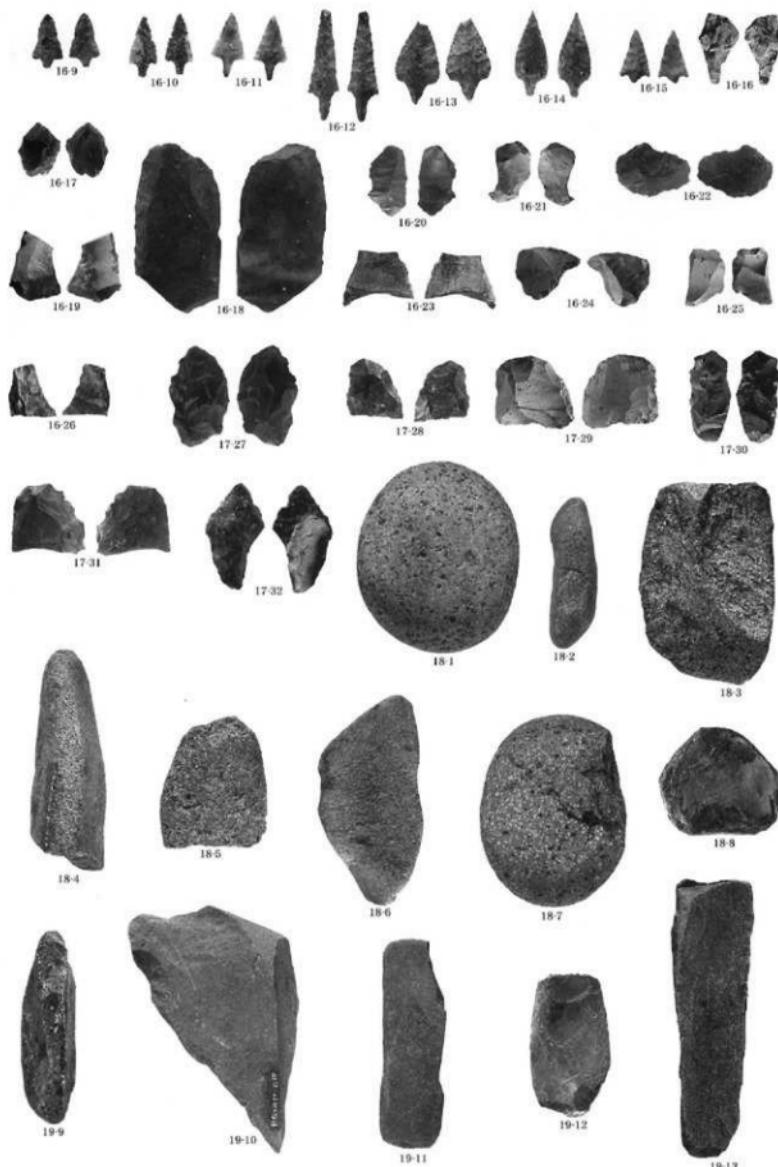
写真図版4



写真図版 5 遺構内出土遺物・遺構外出土土器（1）



写真図版 6 遺構外出土土器 (2)



写真図版 7 遺構外出土剥片石器（2）・遺構外出土礫石器（1）



写真図版 8 遺構外出土砾石器 (2)・石製品

参考文献【() 内は文献番号】

- (1) 青森県教育委員会 1998a 『見立山Ⅰ遺跡・弥次郎塙Ⅱ遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告第238集
- (2) 1998b 『青森県遺跡地図』
- (3) 江坂輝彌 1956 「十日市貝塚群出土の鳥獸魚骨から観た縄文文化の食糧資源」『奥南史苑』1 青森県文化財保護協会八戸支部
- (4) 1958 「青森県蟹沢遺跡調査報告書」『石器時代』5 石器時代文化研究会
- (5) 大橋康二 1989 『肥前陶磁』考古学ライブライアリ 55 ニューサイエンス社
- (6) 音喜多富寿 1972 『八戸市松ヶ崎遺跡発掘調査報告書』
- (7) 滝沢幸長 1967 『松ヶ崎貝塚』
- (8) 八戸市教育委員会 1990 『八戸市内遺跡発掘調査報告書1』八戸市埋蔵文化財調査報告書第36集
- (8) 1994 『八戸市内遺跡発掘調査報告書6』八戸市埋蔵文化財調査報告書第60集
- (10) 1995a 『八戸市内遺跡発掘調査報告書7』八戸市埋蔵文化財調査報告書第61集
- (11) 1995b 『八戸市内遺跡発掘調査報告書8』八戸市埋蔵文化財調査報告書第65集
- (12) 1998 『八戸市内遺跡発掘調査報告書10』八戸市埋蔵文化財調査報告書第74集
- (13) 1999a 『八戸市内遺跡発掘調査報告書11』八戸市埋蔵文化財調査報告書第77集
- (14) 1999b 『西長根遺跡一平成9年度発掘調査』八戸市埋蔵文化財調査報告書第80集
- (15) 2000 『八戸市内遺跡発掘調査報告書12』八戸市埋蔵文化財調査報告書第83集

報告書抄録

全書名	松ヶ崎遺跡							
調書名	八戸南環状道路建設事業に伴う遺跡発掘調査報告							
シリーズ名	青森県埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第291集							
編著者名	中村 哲也・佐藤 純子							
編集機関	青森県埋蔵文化財調査センター							
所在地	〒038-0042 青森市新城字天田内152-15 TEL 017-788-5701 FAX 017-788-5702							
発行年月日	平成13年3月30日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所住地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
まつがき 松ヶ崎遺跡	あおもりけんいわてのし 青森県八戸市 とおかいち 大字十日市字 かざきらい 風浪、ほか	市町村 02-203	遺跡番号 03-068	40° 28° 50°	141° 30° 57°	990705 991029	3,900m ²	八戸南環状道路 建設事業に伴う 発掘調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物			特記事項	
松ヶ崎遺跡	集落	縄文時代	土坑	土器・石器				

青森県埋蔵文化財調査報告書第 291 集

松ヶ崎遺跡

一八戸南環状道路建設事業に伴う遺跡発掘調査報告—

発行年月日 平成 13 年 3 月 30 日

発 行 青森県教育委員会

〒 030 - 0801 青森市新町二丁目 3 - 1

編 集 青森県埋蔵文化財調査センター

〒 038 - 0042 青森市新城字天田内 152 - 15

TEL 017 - 788 - 5701 FAX 017 - 788 - 5702

印 刷 株式会社 三栄企画印刷

〒 038 - 0121 青森市妙見 3 - 2 - 19

TEL 017 - 738 - 0040 FAX 017 - 738 - 0880

